神と人間の交響心環(ハートネイチャーオーケストラ)

Zero'Absorute

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神と人間の交響心環（ハートネイチャーオーケストラ）

【Ｎコード】
Ｎ２８７８Ｍ

【作者名】
Ｚｅｒｏ' Ａｂｓｏｒｕｔｅ

【あらすじ】
この世に存在する多種多様な命。その中でも人間は自分達を特に進化した生物だと過信してしまいがちである。・・・でも、もし、人間の未来を脅かす世界最強の生命体が居たとしたら・・・歴史を変える大惨事、地球の天災、自然の猛威。これまでの被害が仕組まれた物だったとしたら・・・

貴方は、信じますか？

プロローグ　文月学園に転入生！！（前書き）

どうも初めましてＺｅｒｏと申します。初投稿です。駄文ですが何卒宜しく御願いします！！

プロローグ　文月学園に転入生！！

？「ここが俺の新しい高校か・・・」

桜舞い散る４月。ここ文月学園に一人の高校生が
やって来た。
彼の名は崇眞焔王(そうまかげろう)転入生である。
焔「どんな奴が居るんだろうなあ・・・」

そう言って門を通り、玄関に入ろうとした時、誰かに呼び止められた。

？「おお、お前が転入生の崇眞焔王か。」

声のした方を見ると、そこには筋骨隆々としたゴリラ・・・・・・
もとい西村先生が
立っていた。

焔「御早う御座います西村先生。」
西「おう、よく来たな。だが少し来るのが遅くないか？」
焔「転入生はこうでなくっちゃ」
西「そうでなくても良いと思うが・・・しかしすまないな崇眞。お前の教室は
Ｆクラスだ。」
焔「何で謝る必要があるんすか？」
西「いや、何でもない。早く行け。」
焔「？は～い。」

いざ教室へ！！すると、
「・・・・・・・・しまった！！」
焔王はここへ来てようやく自分の犯したミスに気が付いた。
「・・・・・・・・・っ！！」ダッ
焔王は走った。
焔「畜生！！どうしてこんな事に！？もっと早く対処していればこんな事には・・・！！」
焔王が困っている理由。
それは・・・・・・・・・・・・・

焔「Fクラスって何処だあああああーーーー！！」

こうして、焔王の新しい学園生活が始まった。

焔「・・・・・・とりあえず
Aクラスに行って聞いてみるか」

Aクラスは大きかったのですぐに分かった。

ガラッ
焔「失礼するぞ。」
？「あれ？もしかして君が転入生の崇眞焔王君？」
焔「そうだけど・・・え～っと・・・・・・どなた？」
？「ああゴメンゴメン。ボクは工藤愛子って言うんだよ♪特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ♪」

焔「後半ちょっとヤバくなかったか？」
愛「あははっホントの事だよ～」
焔「そうなのか。まあ程々にな」
愛「ところで何か用？」
焔「ああそうだった。Ｆクラスが何処か分かるか？」
何だかんだで参分後・・・

焔「教えてくれてありがとうな、工藤。」
愛「愛子でいいよ♪」
焔「分かった。それじゃ愛子、またな」
愛「うん。またね～」

そして焔王はＦクラスに
向かった。

オリキャラ設定（前書き）

タイトル通りオリキャラの紹介文です。これからも読まれる方は是非これを読んで下さい特徴が多くてややこしいかもしれないのでご了承下さい

オリキャラ設定

崇眞焔王（そうまかげろう）
列記としたサイボーグ
（性能は本編で公開予定）
何故か記憶が殆ど無い
髪は白色
男の割に案外ロング
（後ろ髪は手の肘辺りまで）顔はかなりいい
制服のボタンは常に全開

親は数年前に何者かに殺害され、現在は独り暮らし

普段は滅多にキレないが、大事な人等が傷ついたり
するとかなりキレる
本気でキレている時は目が赤くなり、髪が逆立つ

召喚獣は足が無く、常に浮いている
（攻撃方々は本編で公開予定）

メガギア

人ではなく悪魔
普段は姿を見せず、地面や壁等から現れる
特定の形をした体を持っておらず、常に影の様にユラユラ動いている
最初の段階ではまだ焔王が記憶を失った事に気付いていない

首を何処までも伸ばせる
首は機械の様な電線で繋がれている

リギンス

メガギアと同じく悪魔
体型は人の形をしている
手は大きな爪状になっていて体の所々に棘がある
体色は白
目はカメレオンの様で口は人間の耳たぶの位地まで
裂けている
空を飛んだり瞬間移動が出来る

オリキャラ設定（後書き）

紹介として出てきましたがメガギアやリギンスの出番はもう少し後だと思います

第壱話　廃屋での決意

Ｆクラス前

「・・・・・・何だこれ？」
目の前にあるのはゴミ置場ーーーーもといＦクラス。
いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやよく考えてみろ。これが、これが高校の教室なのか！？確かにまだ中には入ってないから設備とかは知らないけど大体予想はつくよ！！！！っ！？
さては西村、何を黙ってるんだと思ったらそういう事かあああああ！！

（しばらくお待ち下さい）

焔「ゼエ・・・ゼエ・・・いかん・・・少し気がトンでいた」
処理落ちしかけていた焔王は何とか自力で持ちこたえた。
焔「さて、と・・・」
心を落ち着かせ、今壱度目の前の真実と向き合う。
・・・うん、やっぱりおかしい。Ａクラスが高級ホテルみたいだったから俺の予想だと普通の教室位だと思ったんだが・・・まあここまで来た以上仕方ないか。よし！！覚悟決めるぞ！！俺のやるべき事が決まった！！！！

焔「西村を殺って帰るか」
職員室に行こうと一歩進んだその時、
？「お待たせしました。転入生の崇眞君ですね？」
誰かに話し掛けられたので後ろを見るとそこには貧相な体をした、いかにも冴えない風体のオジサンが立っていた。・・・・・流石はFクラスの担任だけはあるな。全くと言っていい程覇気がない。
焔「貴方がFクラスの先生ですね？」
？「はい。福原慎と言います。宜しく御願いします」　焔「こちらこそ」
福「じゃあ後で呼びますので、少しここで待っていて下さい。」
しょうがない。あのゴリラに地獄を見せるのはまた今度にしよう。
西村、ラッキーだったな・・・・・・

先生が教室に入る。すると弐、参分もしない内に、
福「それでは崇眞君。中に入って来てください。」
と言われた。既に全員の紹介が済んでいたらしい。

ドアを開け、中に入る。錆臭さを感じるのは俺だけだろうか。

「崇眞焔王だ。今年壱年宜しく頼む。」
手短に済ませ、空いていた席に座る。うん、予想通りめっちゃ酷い設備だ。クラスの皆は見る限り至って普通に見えるんだが・・・いや畳・・・畳ってちょっと・・・

なんて事を考えていると、横から誰かが近付いてきた
？「崇眞・・・だったな」
声のした方を見ると、そこには紅い髪をツンツンにした、軽く佰八拾センチはある男がいた。

焔「・・・・・・誰だ？」
？「おっと、すまない。坂本雄二だ。宜しく頼む。」焔「ああ、宜しく」
結構ワルみたいなガラしてるな。昔結構荒れてたっぽいし。ん？なんか周りからもどんどん人が来た。
？「ウチは島田美波。宜しくね、崇眞。」
？「ワシは木下秀吉じゃ。宜しく頼むぞ、崇眞。」
？「姫路瑞希です。宜しく御願いします、崇眞君。」　？「・・・・・・・・・土屋康太」
？「それで僕が「弐年生を代表するバカだ」雄二！！なんて事を言うのさ！？そんな紹介じゃ僕がだれか分からないーーーー」
焔「成る程。よし覚えたぞ。坂本に島田に木下に姫路に土屋に・・・・・・吉井だな」　明「バカって単語で僕の名前が連想されたという事実に涙が出そうだよ・・・・・・」　焔「悪かったな吉井。半分冗談だ。」
明「残りの半分は何！？気になって眠れないよっ！！」
福「そこの人達、静かにしてください。」
バンバンと教卓を叩いて注意される。
明「あ、すいませ」
バキッバラバラドシャッ
その衝撃で教卓がゴミの山と化した。もろっ！！
福「え～・・・代えを持ってきます。しばらく待っていて下さい。」
そういって教室を後にする先生。すると、
明「ねえ雄二。ちょっといいかな？」
雄「何か用か？」
弐人も外に出ていった。吉井の奴、何か企んでるのか？

数分後・・・・・・・
お、戻って来た。ところで先生。教卓はボロいのしかないのか？そして坂本。何か言いたげだが何する気だ？

雄「Ｆクラス代表の坂本だ。代表でも坂本でも何とでも呼んでくれ。さて、皆に壱つ聞きたい。

カビ臭い教室。

古びた畳。

足の折れた卓袱台。

雄「Ａクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがーーー」

数秒間静かになる。そして、

雄「ーーーー不満はないか」

「「「「「「「大ありじゃあっ！！！！」」」」」」」

見事にハモった。ちなみに俺も言ったぞ！！こんな所で壱年過ごすのはゴメンだからな！！皆も気持ちは同じのはずだ！！

「そうだそうだ！！」

「いくら学費が安いからってこの仕打ちはあんまりだ！！改善を要求する！！」

「Ａクラスだって同じ学費なんだろ！？この差は酷すぎる！！」

凄まじい勢いで次々に上がる不満の声。そらみろ！！俺の予想は見事に当たった！！

雄「皆の意見は最もだ。そこでーーーー」

お？何かするのか？上等じゃねぇか！！設備を手に入れる為なら何だってーーーー

雄「我々Ｆクラスは、Ａクラスに対し試験召喚戦争を仕掛けようと思う！！」

よっしゃぁぁぁぁぁぁ！！やったるぜぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！！

・・・・・・・しけんしょうか・・・何ソレ？美味しいの？

第弐話　観察処分者と宣戦布告・がんばれ明久！！（前書き）

更新遅れてすいません！！
以後気をつけます。それでは、どうぞ。

第弐話　観察処分者と宣戦布告・がんばれ明久！！

坂本が言ってた試験召喚戦争って何だ？もしかして事前に貰ってたパンフレットに書いてあるのか？よし、読むか。どれどれ・・・・・・

F「勝てる訳が無い」
F「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」
F「姫路さんがいたら何もいらない」

なんか最後おかしくなかったか・・・？

雄「そんな事は無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

読み終わった～。　それにしても凄い自信だな、坂本。何かいい策でもあるか？

F「何を馬鹿な事を」
F「出来る訳が無いだろう」F「崇眞結婚してくれ」

ゾワッ（鳥肌が立つ音）

焔「・・・・・・・・・・・・」

雄「そうでもないぞ。実際このクラスには試験召喚戦争で勝つことの出来る要素が揃っているからな。よし、それを今から説明してやる。」

畜生！！男に告白されるなんて・・・・・・！！

雄「おい康太。何時までも姫路のスカートを覗いてないで前に来い」
ム「・・・・・・・・っ！！」ブンブン
瑞「は、はわっ」
雄「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」
ム「・・・・・・・・っ！！」ブンブン
へぇ～土屋の奴、そんな弐つ名があったのか・・・いやいや、スカート覗いといて否定のポーズとられたって説得力無いから。

雄「姫路は説明する迄も無いだろう。ウチの主戦力だ」。
瑞「えっ？わ、私ですか？」
F「そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった」
F「彼女ならAクラスにも引けをとらない」
F「ああ。彼女と崇眞さえいれば何も要らないな」
焔「よし最後の奴はこの後校舎裏に来い」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

焔「無視かよっ！！！！」
雄「崇眞、すまんが静かにしてくれ」

焔「坂本。ここで注意するべき人は俺じゃないだろ」　雄「木下秀吉だっている」
焔「畜生っ！！！！」

F「おお・・・・・！」
F「確か、演劇部のホープ！！　」
雄「当然俺も全力を尽くす」F「確かに何かやってくれそうな奴だ」
F「坂本って、小学生の頃は神童って呼ばれてなかったか？」
F「それじゃあ振り分け試験の時は姫路さんと同じ体調不良だったのか」
F「じゃあAクラスレベルが弐人いるって事だよな！！」
雄「おっと、まだ要るぞ。崇眞焔王。」

ん？何で俺が？

雄「奴こそが有名な殺戮魔神（デス・チェイサー）だ」
F「な、何だと！？」
F「あいつが近辺の暴力団を片っ端から潰したっていう噂の・・・」
F「これはいけるんじゃないか！？」

・・・・・そうか、前の俺にはそんな名前があったのか。

雄「どうした？崇眞。考え事してるのか？」
焔「いや、何でもない」

どおりで周りの不良達が俺を見て逃げちまう訳だ。まあいい、取り敢えずこれは後にして坂本の話を聞くか
雄「それに吉井明久だっている」

ーーーーーーーーシン。

なんか静かになったぞ！！吉井ってシケキャラ！？

明「雄二！！何でここで僕の名前を呼ぶのさ！？せっかく上がった士気がーーーーて何で僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！！」

・・・・・・ああそうか。確かアイツはーーーー

雄「そうか。知らないのなら教えてやる。コイツの肩書きは観察処分者だ」

言っちまった。

F「・・・それって馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

明「ち、違うよ！ちょっとお茶目な拾六歳につけられる名称で」

雄「そうだ馬鹿の代名詞だ」焔「人間のクズだ」

明「肯定するなバカ雄二！！あと何で崇眞君まで加勢してるの！？」

お、なんか吉井を弄くるのって面白いな

瑞「あの～それってどういうモノなんですか？」

焔「なんだ、姫路は知らないのか？」

瑞「はい・・・じゃあ崇眞君は転入生なのに何で知ってるんですか？」

焔「パンフレットに壱ページ分デカデカとのってたぞ。馬鹿の中の馬鹿、人類を超越する馬鹿、救い様の無い馬鹿・・・とにかく何の役にも立たないクズの事だ。」
瑞「へえ～本当に凄いんですね！」
明「ああっ！！穴があったら入りたい！！」
雄「とにかくだ。まずはDクラスを攻めようと思う。皆！この境遇は大いに不満だろう？」
F「「「「「「当然だ！！！！」」」」」」　雄「ならば全員ペンを取れ！！出撃の準備だ！！」
F「「「「「「おおーーーーっ！！」」」」」」
雄「俺達に必要なのは卓袱台ではない！！Aクラスのシステムデスクだ！！」
F「「「「「「おおーーーーっ！！」」」」」」

雄「よし、明久、Dクラスに宣戦布告してこい」
明「ねぇそういうのって大抵酷い目に遭うよね？」
焔「大丈夫だ吉井。奴等はそんな真似はしない」
明「え？崇眞君何で分かるの？」
焔「事前に使者に手を出さない様に話をつけといたからな」

勿論嘘だ。

明「わかった！！じゃあ逝って来るよ」

あれ？何か字が違った様な・・・・・・・・・

数分後、吉井の叫び声が聞こえてきた。

第参話　作戦会議と焔王の正体とその性能（前書き）

所々で焔王の能力が出てきます。それでは第参話、どうぞ。

第参話　作戦会議と焔王の正体とその性能

明「騙されたぁっ！！」

凄い勢いで吉井が教室に入ってきた。さっきの叫び声といい殺されかけた様だ。

雄・焔「「やはりそうきたか。」」

息ピッタリだ。

明「やはりって何だよ！！やっぱり使者への暴行はあるじゃないか！！」

焔「ハッハッハ！すまないな吉井！！」

明「少しは詫び入れろよ！！」瑞「吉井君、大丈夫ですか？」

おお、姫路は優しいな。

焔「まさかお前、吉井の事がーーーー」

ピピッ、ピピッ、

焔「ん？もうそんな時間か」雄「よし、作戦会議を始めるから屋上に行くぞ。」

坂本が教室の外に出ていった。

美「吉井、本当に大丈夫？」島田も吉井が心配なのか～

明「大丈夫だよ」美「そう良かった・・・まだウチが殴る余地はあるんだ」　明「ああっ！！もうダメ！！死にそう！！」

島田の奴、ツンデレだな。
焔「じゃあ俺も行くか」
自分の鞄からペットボトルを壱本取り出し、屋上に向かった。

ーーーー屋上にて

雄「明久、宣戦布告はして来たな？」
明「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たよ」
美「それじゃ、先に昼って事ね？」
雄「そういう事だ。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食えよ？」
瑞「吉井君ってお昼食べないんですか？」
明「一応食べてるよ。」
雄「あれは食べていると言えるのか？」
焔「坂本、どういう事だ？」雄「いや、だってーーーー塩と水だろ？」
焔「吉井、お前に何があったんだ・・・・・・？」
自分はというと、ペットボトルを傾けて中の物を飲んでいる。
明「失礼な！ちゃんと砂糖だって食べてるさ！！」
秀「それは舐めるというものじゃろう」
直ぐに木下がツッコミを入れる。そういえば聞きたい事があったんだよな・・・
焔「なあ木下」
秀「ん？何じゃ？」

焔「非常に言いにくいんだが・・・その・・・何で男の制服を着ているんだ？何か悩みでもあるのか？」
秀「お主何て事を言うのじゃ！？ワシは列記とした男じゃぞっ！？」
焔・明「えええええええええええええ！？」
秀「驚くでない！！あと明久！！お主は前から知っておるじゃろう！？」

何だと！？男の癖にあの顔は卑怯じゃないか！！
秀「ならば何故にお主はワシ等と違う服を着ておるのじゃ？」
焔「最初に着た時カッコ悪かったから」

グビッとペットボトルを傾ける。いや～うまいな。

明「ねぇ、それ何？」
焔「お、よく聞いてくれた。俺の大事な栄養源だ。」　明「何だと！崇眞君も貧しい御飯じゃないか！！」
焔「いや、俺はこれさえあれば生きていけるんだ」
壱同「「「「「「何で？」」」」」」

何でって言われても・・・まあいいか。言っちまおう。

焔「だって俺、サイボーグだから。」

壱同「「「「「「「えええええええええええええ！？」」」」」」」

皆が凄まじい顔で俺を見ていた。

焔「そんなに驚く事か？」

明「そりゃ驚くでしょ！！」

美「じゃあ中身機械なの！？」瑞「凄いです！！初めて見ました！！」

ム「・・・・・・見た目は普通」

秀「意外じゃ・・・お主がサイボーグだったとは・・・」

雄「・・・じゃあ何か性能を見せてくれ。」

焔「いいだろう。じゃあ見ておけよ」

そういって俺は手の形を変え、ロケットランチャーを出した。

雄「コイツは驚きだ」

明「凄いよ崇眞君！！ねぇ、他には？」

焔「しょうがないな。よし、見とけよ。」

ガシャガシャと音を立て、さっきまでロケットランチャーだった物はマシンガンになった。

美「こ、こんなの初めて・・・・・・」

瑞「もう感激です・・・！！」

焔「じゃあ後は今後のお楽しみという事で最後はこれだ」

標的は・・・ふむ、あの交差点でいいか。

バシュッ

ズドオッ

道が拾字型に爆発した。

ム「・・・それはやりすぎ」
秀「あの道はどうするのじゃ・・・・・・？」
焔「だろ？だからあまり使えない性能なんだ。」
雄「聞きたいことがあるんだがーーーー」
焔「それならまた今度にしてくれないか。今は試召戦争の作戦会議中だろ？」
雄「そうだな、そうするか」秀「雄二よ、何故Dクラスなのじゃ？段階を踏むならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」
瑞「そういえば、確かにそうですね。」
雄「とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」
明「それじゃDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」
雄「ああ、確実に勝てるとは言えないな。」
焔「まあ坂本、俺がいるからDクラスも敵じゃないだろうさ」
雄「ん？もしかして、何か作戦があるのか？」
焔「作戦と言えるかどうかは分からないが・・・まあそれはDクラス戦の楽しみって事で」
明「ねぇ雄二、今の話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」
雄「負けるわけないさ。いいかお前ら、このクラスはーーーー最強だ」
焔「最強・・・か」
美「良いわね、面白そうじゃない！」
秀「うむ、Aクラスの奴等を引きずり落としてやろうかの。」
ム「・・・・・・（グッ）」

瑞「が、頑張ります。」

そして、俺達はDクラスとの戦争に備え、坂本の作戦に耳を傾けた。

雄「そろそろ昼休みが終わるな。」
焔「それじゃあ教科書を壱通り貸してくれ。」
雄「まさか勉強してないのか？」
焔「大丈夫だから心配するなって」

適当にパラパラページを捲って単語等を覚える。

焔「サイボーグだから記憶力に人壱倍長けてるんだぜ。」
雄「結構いい性能だな～」

焔「よし、覚えた。それじゃ」
雄「ああ。」

瑞「私も一緒に行きます。」焔「ん？何で？」
瑞「振り分け試験の時、途中退席してしまって私も零点なんです。」
焔「そうなのか。じゃあ一緒に行こうぜ」
瑞「はい！」

ーーーそして、Dクラス戦が始まった。

焔「先生、次！」

俺はというと、回復試験を受けている。

？「何で貴方がFクラスなんですか・・・？」

そういって、勿体無いと言わんばかりの表情で俺に紙を渡してくれたのは高橋先生。知的な眼鏡がクールな女性だ。

いや～やっぱり記憶機能ハンパないな。勉強しなくて良さそうだしな♪

そんな調子で伍拾分後・・・

高「では、そこまでにして下さい。」

焔「姫路、出来はどうだった？」

瑞「結構出来ましたよ。」

焔「そうか。それじゃ俺達も戦線に参加するか」

瑞「あ、じゃあ先に行っててくれませんか？私坂本君に呼ばれてたんです。」

焔「わかった。また後でな～」

瑞「頑張って下さいね」

そういって俺は姫路と別れ戦場に向かった。

第四話　Dクラス戦「Fクラスをナメんなよ」！！（前書き）

後半から焔王視点ではなくなっています。それでは第四話、どうぞ。

第四話　Dクラス戦「Fクラスをナメんなよ」！！

焔「吉井達は大丈夫なんだろうか？」

回復試験を受けた今、俺は戦場に向かって疾走中である。

焔「それにしても全然声が聞こえないな・・・」

いつ着くんだろうかと思っていたその時、

須「連絡致します」

ん？この声は須川か？何かの作戦か？

須「船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。」

焔「あはっ！？」

須「生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです」

焔「ハハハハハ！！須川の奴ナイスだな！！そして吉井、おめでとう！！」

愛「あれっ？崇眞君？」

焔「ん？よう、愛子。クククッ、なあ、今の放送聞いたか？」

愛「うん、聞いたよ。吉井君可哀想に・・・」

焔「何を言ってるんだ？ここは友達として祝福の言葉を送ってやるべきだろ？」　愛「そうなのかなあ・・・何であんな放送したんだろ？」　焔「さあな、よく分からんが試召戦争には欠かせない作戦

でもあるんだろ？」
愛「そういえば、何で崇眞君がここにいるの？」
焔「Dクラスに向かう途中だったからな」
愛「ここはAクラスだからDクラスは向こうだよ？」
焔「・・・・・・・・・・へ？」

だからいつまで経っても目的地に着かなかったのか・・・・・・・・・・・・・

愛「ひょっとして、分からなかったの？」
焔「フンッ！残念でした！本当はAクラスに用事があって来たわけです。」
愛「思いっきり顔にうそって書いてあるよ」
焔「何・・・・・・だと・・・・！！」

ってヤバイ！！道草してて戦争に参加出来なくてそのせいで負けちまったら洒落にナラン！！

焔「それじゃ愛子！またの機会に！！」
愛「あ、ちょっと待って」
焔「どうした？」
愛「その・・・よかったら今日一緒に帰らない？」
焔「ああ。別に良いぞ。」
愛「ありがと♪」
焔「それじゃ放課後に迎えに来るから」
愛「うん！」

そうして俺は愛子にサヨナラを言い、Dクラスに向かった。

戦場に向かうと、それはもう酷い状態になっていた。
明「崇眞君！！よかった！！ちょっと手伝ってよ！！」
焔「ああ分かってる。元々その為に来たんだからな」
F「おお！！崇眞が来たぞ！！」F「崇眞！早く手を貸してくれ！このままじゃもう持たない！！」
焔「大丈夫だ、あとは俺に任せろ！！」
明「了解！！」
焔「五十嵐先生。Fクラス崇眞焔王がここにいるDクラス全員に化学で勝負を申し込む！！」
明「ええっ！？大丈夫！？」
D「壱人で勝てると思ってるのか！？」
D「面白い！受けて立つ！！」D「後悔させてやるぜ！！」

Dクラス側は八人か・・・だがまあ余裕だな。

焔「試獣召喚（サモン）！！」

初めて召喚獣を呼んだ。さてさて、どんな格好だ？

明「崇眞君の面影が一切見当たらないね」

そう、俺の召喚獣はドクロみたいな顔で、宙に浮いており、紙の様にペラペラした腕が六本生えていた。

そして、少し遅れて点数が表示される。

D八人・６１２点
F崇眞焔王・７７３点

D壱同「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」」」」

明「高っ！！何あの点数！？」

焔「死にたくなけりゃ今の内に降参しろ。」
D「う、うるせぇ！！お前ら、行くぞ！！」
D「「「「おおーーーーーーっ！！」」」」
D「数は俺達の方が有利だ！！とにかく突っ込め！！」

全員が走ってきた。

焔「猪突猛進か・・・お前ら、バカだな」
召喚獣に軽く指示を出し、伸びていた腕を畳ませる。

ビュン

バシュッ！！

まさに一瞬の出来事だった。畳まれていた腕が凄い速さで伸びたのだ。当然、前に走っていた召喚獣は簡単には避けられない。結果、参人の召喚獣が一撃で両断された。

D伍人・４０９点
F崇眞焔王・７７３点

「「「「「「・・・・・・・・は？」」」」」
気付けば、Fクラスまで驚いていた。

D「何だ今の技は！？」
D「くそっ！！こうなったら周りを取り囲め！！」
D「伍方向からならいけるだろ！！」

今度は全方向から突撃してきた。

焔「残念ながらそうはいかねぇんだよなぁ・・・」

ガァン！！

D「「「「「何っ！？」」」」」

Dクラスの連中が驚くのも無理はない。何せ、斬りかかったのに弾かれてしまったのだから。

Ｆクラスはと言うと、驚きのあまりに固まっている。
Ｄ「怯むな！！どんどん斬りまくれ！！」
そう言って、次々に攻撃する相手の召喚獣。

Ｄ伍人・４０９点
Ｆ崇眞焔王・７２６点

弾かれているとはいえ、あれだけ斬られて４７点しか減らせてないなんて。もうチートとしか言いようが無いだろう。

焔「じゃあそろそろ終わらせるか」

そう言った瞬間、焔王の召喚獣の体が光だし、相手の召喚獣を巻き込む様に爆発した。

Ｄ壱人・４０点
Ｆ崇眞焔王・７２６点

おかしい。絶対おかしい。自分自身の召喚獣も爆発に巻き込まれたのに点数が壱点も減ってない。

ちなみに、あの点数だけあって、Ｄクラス側は壱人しか残っていな

い。

D「ち、畜生おおおお！！」

投げやり状態で突っ込んできた召喚獣を両断する。

「「「「「最強だ・・・・・・」」」」」

その時、誰もがそう思った。すると、

「Dクラス代表平賀源二、討死！！」

そんな声が聞こえてきた。

明「って事は・・・・・・」

焔「ああ、どうやら勝ったみたいだな！」

今ここに、Dクラス戦が終結した。

第四話　Dクラス戦「Fクラスをナメんなよ」！！（後書き）

もうそろそろメガギアやリギンスの出番が来ると思います。

第伍話　バカの度忘れと壱悶着（前書き）

内容を見直すのに参拾分かかりました。それでは第伍話、どうぞ。

第伍話　バカの度忘れと壱悶着

所変わって、Ｆクラス

明「雄二！何で設備を交換しなかったんだよ！！」

そう。俺達はＤクラスに勝ったのだが、教室の設備を交換しなかったのである。

雄「明久、俺達の目標はあくまでＡクラスのはずだろ？」

焔「つまり、Ｄクラスの設備なんかであいつらに満足してほしく無いって事さ」

雄「よく分かったな」

焔「意志の疎通が大事だって言うだろ？」

美「じゃあＤクラスと戦ったのは何か意味があったの？」

雄「召喚獣の扱いに慣れさせる為になるし、Ｂクラス戦の時に使えるからな。」

焔「俺はまだ慣れてない」

明「いやいや、あれだけ強かったら十分でしょ」

秀「む？雄二よ、次の相手はＢクラスなのか？」

雄「ああそうだ。」

明「それも何か意味があるの？」

雄「勿論だ。まあその話はまた今度してやる」

ピピッ

美「あれ、何の音？」
焔「俺の時計だ。悪いが先に帰っていいか？」
瑞「何か用事でもあるんですか？」
焔「ああ、ちょっと愛子と一緒に帰る約束を」
明「それってAクラスの工藤さん？」
焔「おう、それじゃ」

そろそろAクラスも授業が終わるな。愛子を待たせちゃ可哀想だし、さっさと行くか。

雄「なあ、あれどう思う？」
瑞「結構お似合いだと思いますよ」
美「ウチも早くアキとあんな風に・・・・・・ってどうしたのアキ？」
明「僕もちょっと行ってくるよ・・・・・・」
雄「おい明久、待てーーーってもう行っちまったか」
ム「・・・・・・無謀すぎる」
美「坂本、何かマズイ事でもあるの？」
雄「何だ、お前ら忘れちまったのか？アイツはサイボーグなんだぞ？」
「「「・・・・・・・・・あ」」」
雄「いくらFFF団でも崇眞には敵わないだろ」

瑞「それじゃ痛い目を見るのは・・・」
美「アキ達の方って事ね」

全員がＦＦＦ団の死を覚悟した。

校門前にて

焔「よう、待たせたな」
愛「いいよ、ボクも今終わったばかりだから」
焔「そうか。じゃあ帰ろうぜ」
愛「うん♪」

明「待つんだ！！そこの裏切り者！！」
焔「何だ吉井か。俺が裏切り者ってどういう事だ？」
Ｆ「「「「「俺達だっているぞ！！」」」」」
焔「須川とその他諸々まで何の用だ？」
Ｆ「その他言うな！！」
Ｆ「俺達だってデートしたいんだコンチクショー！！」
焔「・・・お前ら勘違いしてないか？俺と愛子はただ一緒に帰るだけだぞ？」
Ｆ「何！？一緒に帰って部屋に入れて押し倒して夜遊びしたいだと！！」
焔「そこまで言ってない」

全力で否定する。愛子に誤解されかねないからな。

須「という訳だ崇眞！！その罪、死して償え！！」

焔「まあいい。お前らがその気ならこっちにも対処法ってのがあるからな」

明「行くぞ裏切り者！！」

焔「吉井、俺がさっき言った事覚えてるか？」

明「勿論さ！！崇眞君が実はサイボーグ・・・・・・ってまさか！？」

焔「じゃあな、吉井」

明「だ、誰か助けっーーーー」

パウッ！！

愛「・・・・・・・・・・・・え？」

ズドォッ

そう言って俺は目を拾字型に光らせ、吉井達を囲む様にビームを放った。

焔「さてと、じゃあ愛子、行こうか」

愛「ね、ねぇ崇眞君、今のって何ーーーー」

先に歩く俺の背を、愛子が不思議そうに見ていたのは言うまでもない。

第伍話　バカの度忘れと壱悶着（後書き）

そろそろ夏休みです。問題集が何よりも面倒くさい！！でも更新のほうも頑張ります！！

第六話　そして現れた、黒い悪魔（前書き）

ようやく「奴」の出番です！！それでは第六話、どうぞ。

第六話　そして現れた、黒い悪魔

焔「愛子、どうした？」
愛「ちょっと聞きたい事があるんだけど」
焔「ほう」
愛「さっきのアレって・・・何？」

文月学園の帰り道、愛子が唐突にそんな事を聞いてきた。

焔「ハハハ、ナニヲイッテイルノヤラ」
愛「思いっきり片言になってるんだけど？」
焔「とにかくだな、別にお前は知る必要が無いから気にしなくていいぞ」
愛「そうかな～、ボクと崇眞君がより良い肉体関係を持つには知っておくべき事だと思うよ？」
焔「っ！！」

飲んでいたガソリンが鼻に入りかけた。

焔「何を言うかぁ！！」
愛「あははっ、やっぱり崇眞君は面白いね」
焔（ん？これってひょっとしてさっきの話題消えてる？よっしゃ！

！こうなりゃ他の話で注意を逸らすか）

焔「月が綺麗だな！」
愛「逸らさないでよ」
焔「すんません」

大失敗に終わった。

愛「ねえってば」
焔「う～～～ん・・・・・・」

愛子は下から覗き込む様に俺の顔を見てくる。その可愛らしい眼差しにとうとう耐えきれず、

焔「分かったよ、言うぞ」
愛「うん♪」
焔「俺、実はサイボーグなんだ」

愛「・・・・・・ふ～ん」
焔「何だ？驚かないのか？」
愛「あれ？ここ驚くべきトコ？」
焔「いや、まあそういう訳じゃないんだが」
愛「じゃあさ、質問していいかな」
焔「別にいいぞ」
愛「その・・・サイボーグになる前ってどんなだった？」
焔「正直、前の記憶は何壱つ無いんだ。主に何をしていたかとか、誰がサイボーグにしたのかとか、自分がどういう奴だったかとか、

そういった事とかも全部含めてな」

愛「前の記憶がほしいの？」

焔「そうだな。俺の望みは失われた記憶を取り戻す事だからな」

愛「そう・・・なんだ」

焔「ん？どうした？俺何か悲しくなる様な事言ったか？」

愛「記憶が戻った時、ボク達の事忘れちゃったりしない？」

焔「大丈夫だ。安心しろ、俺はそんな真似はしない」

愛「ホントに？」

焔「約束する」

愛「分かった！じゃあこの話はこの位にしよ？」

焔「ああ」

愛「崇眞君は何処の道で曲がるの？」

焔「俺はもう少しの所だが・・・愛子はここなのか？」

愛「うん。じゃあね～」

焔「壱人で平気か？」

愛「心配無用♪」

焔「そうか、じゃあな」

微かに笑みを浮かべて返事をする。

こうして、学園生活壱日目は幕を閉じた。

ーーーー様に思われた。

？「久し振りだな、焔王」

焔「っ！？」

急に声が聞こえ、思わず立ち止まる。

？「何だ？何も覚えて無いのか？」

焔「・・・何故分かった？」

？「俺はお前の心が読めるからな。勿論、其程長い間関わらないと無理だが」

その声を聞いた瞬間、頭をビリッと鋭い痛みが走る。そして、俺は思った。

ーーーー前の記憶を手に入れられる。

？「折角会えたのに記憶が無いってのは俺も困るからな」

焔「・・・・・・・ぐっ・・・・」

頭痛に耐えきれず、地に足をつく。

？「おい、大丈夫か？」

焔「ああ・・・」

？「その頭痛の根元は俺か？席を外した方が良さそうだな」

焔「・・・・・・待ってくれ！！」

？「ふむ、何か言いたげだが・・・？」

焔「お前の姿を見せてくれ・・・・・・」

？「無理する必要は無いんじゃねぇか？」

焔「頼む・・・・・・！！」

頭痛がさらに酷くなる。

？「まあ記憶を戻す為なら仕方がないか、よし。記憶が戻ったら俺の名前を当ててみろ。」

そういって、俺の目の前に黒い円が現れ、中から奴が顔を見せる。

焔「・・・・・・っ！！・・・・・・」

独特な模様の仮面。
機械仕掛けの首。
回りを覆う陰。

その姿を見る度、脳裏に浮かび上がる光景。

初めて巡り会った。
一緒に町を歩いた。
共に喜びを分かち合った。

思い出す。薄れていた記憶を。手に入れたいと思い続けた記憶を。

俺はもう一度前にいる相手を確認する。

焔「・・・・・・・メガギア・・・・・・・・？・・・・・」

メ「正解だ。」

そこには前から変わらない友人の姿があった。

第六話　そして現れた、黒い悪魔（後書き）

ここから徐々に焔王の記憶が戻ってきます。

第七話　人間らしさと焔王の想い（前書き）

今回は真面目要素だらけです。それでは第七話、どうぞ。

第七話　人間らしさと焔王の想い

焔「で、何でお前がここに居るんだ？」

少し記憶が戻った焔王は、目の前にいる親友メガギアと会話をしている。

メ「勿論お前に会う為だ。それ以外ここに用は無い」

焔「本音は？」

メ「この辺に旨いラーメン屋があると聞いてな。探してたら偶々お前を見つけたんだ。」

何て奴だ。

焔「相変わらずお前は変わってないな」

メ「お前はかなり変わったな」

焔「何故そう思う？」

メ「サイボーグになっちまったんだろ？」

あれ？バレてる。

焔「・・・見てたのか？」

メ「ああ。」

焔「まあ俺が愛子と話してる時に姿を現さなかったのはお前の気遣いと見ておこう」

メガギアと話をしている内に、焔王は自宅に着いた。
メ「さて、入るか」
ギイッと音を立ててドアが開き、弐人は中に入った。

焔「さて、壱つ聞きたい」
メ「何だ？」
焔「お前は俺がサイボーグになった事について何か知ってるか？」
メ「いや、今日会って初めて知った」

焔「・・・・・・そうか」

メ「聞きたい事がある」
焔「今度は何だ？」

メ「リギンスとはもう会ったのか？」
焔「リギンス？・・・まだ会ってないが・・・ソイツも俺の友人か？」
メ「そんなトコだな。アイツの方から現れるパターンが殆どだろうがな」

焔「俺には見つけられないのか？」
メ「アイツは普段光を曲げて空を飛んでたりするからな。」
焔「毎度思うんだが前の俺って凄いダチがいたもんだよな。」
メ「何を言う。今でもダチだろうが」
焔「有難う。お前、結構優しいな」
メ「俺が普段優しく接するのは大抵の人間以外だ」
焔「ははっ、そうなのか」
メ「悪魔ってのは基本そんなもんさ・・・処で焔王」
焔「・・・ん？」
メ「記憶を完全に取り戻すのか？」
焔「・・・・・・・・・」

完全に、と聞いて焔王は考える。ついさっき愛子が言った事を思い出してしまったからだ。

（記憶が戻った時、ボク達の事忘れちゃったりしない？）

正直、そうならない保証は絶対ないとは言えない。明久達と関わった事等が、焔王の記憶から抹消される可能性だって有り得る。焔王はそうなるのが怖くて仕方がなかった。

焔（俺が吉井達の事を忘れたりしたら・・・？）

メ「・・・何か悩み事でもあるのか？」

焔「・・・学校にいい奴等がいるんだ」
メ「記憶が消えるのを恐れてる様だな」
焔「今はそれが怖いんだ」
メ「お前ともあろう者が怖がるなんてな・・・そんなの今考えるべき事か？」
焔「どういう意味だ？」
メ「要するにお前は今大事な人間がいて、記憶がほしいって事だろ？」
焔「まあそうだな」
メ「なら答えは見えたじゃねぇか」
しばし間を開け、メガギアはゆっくりとーーーー
メ「ずっとソイツ等の近くに居てやれ。」
ーーーーこう言い放った。
焔「・・・・・・」
メ「焦らず、傷付けず、ソイツ等がいつも安心出来る距離に居ろ。」
焔「・・そう・・・だな」
メ「まあ俺から言えるのはこの位だな。」
焔「もう拾分だ、有難う。助かったよ。」
メ「そうか」

焔「先に部屋に行く。お前はどうする？」
メ「じゃあ折角だから泊めさせて貰おうか」
焔「ああ、いいぞ。それじゃお先に」

焔王はそそくさと自分の部屋に入って行った。

ドアにもたれ、焔王は考え事をしていた。
焔「・・・アイツ等が安心出来る距離・・・・」

メガギアの言った事は全て正しいとは言えなかったが、今の焔王にはかなりの助け船になっていた。

焔「アイツ、いい奴だな・・・・・・」

段々目が熱くなってきた。
焔「ふふっ、ホント馬鹿だよなあ・・・」

焔王の目から水滴が落ちて床に溢れた。

焔「何だ・・・？これ・・・」

水滴はどんどん出てくる。まるでこの時を待っていた様に。

焔「何で・・・・・・」

メ「何泣いてんだよ～。さっきの俺の台詞がそんなにも感動的だったか？♪」

焔「なっ・・・・！！コ、コラ！！こっち見るな！！」

メ「どれどれ・・・」

焔「畜生おおおおーーーー！！！！！」

こうして、本当に焔王の学園生活壱日目が幕を閉じた。

ーーーー翌日

焔「おはよう～」

雄「ああ、おはよう」

秀「おはようじゃ」

ム「・・・おはよう」

美「おはよう、崇眞」

瑞「おはようございます、崇眞君」

焔「ん？明久は何処だ？」

雄「明久ならまだ来てないが・・・お前今まで名字で呼んでなかったか？」

焔「それも今日からナシだ。これからは俺の事を名前で読んでくれ。

俺も皆の事名前で呼ぶから」

秀「そうか、改めて宜しく、焔王。」

焔「おう！」

ガラッ

明「おっはよ～！」

焔「よう明久。」

明「あれ？何故に名前？」

焔「今日からそうする。」

明「じゃあ僕もそうしようっと。でも何で？」

こうした理由は壱つ。

焔「皆の事を忘れたくないから。」

第七話　人間らしさと焔王の想い（後書き）

結構この小説続くかも知れませんが、どうかお付き合い御願いします。

第八話　恐怖の弁当と明かされる真実（前書き）

早く清涼祭編が書きたいです！！

第八話　恐怖の弁当と明かされる真実

明「うあ～、疲れた・・・」

午前中の授業を終え、明久は机に突っ伏していた。

雄「それに比べて焔王は楽だろうな・・・」

秀「む、何故じゃ？」

雄「絶対暗記装置（パーフェクトメモリーシステム）が付いてるから、ちょちょっと教科書を見るだけで全部覚えちまうんだ」

美「何ですって！？」

瑞「ズルいです焔王君！！」

明「その頭僕に頂戴！！」

ム「・・・卑怯者・・・！！」

焔「恨むなら俺を造った奴を恨めよ・・・いや～それにしてもサイボーグになって良かった♪」

雄「確かにそればっかりは幾ら恨んでもどうしようもないからな。それより、今は昼休みなんだから早いトコ飯食おうぜ」

焔「ナイス雄二！」

昼飯の燃料を鞄から取り出す。すると、

瑞「み、皆さん・・・」

明「どうしたの、姫路さん？」

瑞「その、御昼御飯なんですけど・・・」
秀「おお、もしや弁当かの？」

焔「弁当？」
雄「お前が知らないのも無理は無いだろ。昨日お前が先に帰った後で決めた事だからな。」
焔「へ～」
瑞「め、迷惑でなければどうぞ！！」
明「迷惑なもんか！ねっ、雄二！！」
雄「ああ、有り難いな」
焔「それじゃ先に行っててくれ。俺は皆の飲み物買って来るから」
明「いいの？僕、塩水以外の物を飲むなんて久しぶりだよ！！」

やめてくれ。聞いてるこっちが泣いちまう。

秀「じゃあ教室で食べるのも何じゃし、屋上で食べるとするかの。」
ム「・・・（コクコク）」
焔「じゃあ飲み物買って来るか～」

燃料の入ったペットボトルを持ち、俺は自動販売機に向かった。

ーーーー売店

ガコンッ

焔「あと弐個か」

美「手伝いに来たわよ～」

焔「美波か、別に良かったんだが・・・」

美「見栄張らなくてもいいのに～」

焔「いや、ホントにいいんだよ。この能力を使っちまえばな」

シュルル、

美「アンタの体は壱体どうなってるのよ・・・？」

焔「これは神流腕（ギルアーム）っていう奴でな、紙状の腕で物を切ったり飛ばしたり出来るんだ」

美「・・・ウチの出番は無いってわけ？」

焔「わかった。わかったから黒いオーラを出すのはやめてくれ。」

ジュースの缶を壱つ渡す。すると、

美「ウチが来た意味無いじゃない！！」

焔「おーい！！キノコ感覚で首を取ろうとするな！！」

ーーーーその後

焔「しかし美波も大変だよな。」
美「何が？」
焔「気の利くライバルがいるからな」
美「っ！？ちょっと、からかわないでよ！！」
焔「ハッハッハ」
美「アンタだって工藤さんとはどうなってるのよ！！」
飲んでいた燃料が鼻に入りかけた。
焔「何の事かな？」
美「今更遅いわよ。思いっきり吹いてたじゃない」

そんな感じで話をしていたら、いつの間にか屋上に着いていた。

ガチャッ

焔「ようお前ら！待たせた・・・・・・・な？」
明「やあ焔王」
雄「早く飲み物をくれ」
ム「・・・・・・遅い」
焔「何で秀吉がぶっ倒れてるんだ？」
明「姫路さんの実力だよ」
焔「マジかよ・・・」
美「もうお弁当無いじゃない！！」
焔（美波。食わない方が良かったと思うぞ。）

こうして早くも俺達の昼食が幕を閉じた。

ーーーー数分後

雄「なあ焔王」
焔「何だ？」
雄「前まで殺戮魔神と言われてたお前が、何でこうも大人しいんだ？」
焔「悪いがサイボーグになる前の記憶は殆ど消えちまってるんだ」
秀「何じゃと？」
瑞「だから坂本君が紹介した時に首を傾げてたんですね。」
焔「ああ。だが、メガギアが少しだけ記憶を戻してくれた。」
美「メガギア？誰その人？友人？」
焔「言ってみればアイツは人間じゃなくて悪魔なんだが・・・」
雄「悪魔が友達って・・・お前凄いトコだらけだな」
メ「そんなこたあねぇよ」
秀「む？今のは誰じゃ？」

焔「丁度良かった。メガギア、出てきてくれないか」
メ「やれやれ、仕方ないな」

俺の目の前に黒い円が現れ、中からメガギアが顔を出した。

明「・・・カ？ナシ？」
メ「初対面でそう言われるのは久しぶりだ」
焔「最初は俺だったな」

分かり易く説明すると、

顔には仮面が付いている。模様がカ？ナシの眉毛抜きバージョン。
頭にギザギザの黒い鉄が装着されている。

と言った感じだ。

雄「へえ、確かに焔王悪魔っぽい格好してるな」
焔「メガギア。前の俺がどんなだったか教えてくれ」
メ「そうだな・・・とにかく人間の事が大嫌いだったな」
焔「人間のくせに人間が嫌いだったのか。」
メ「何を言ってる？」
焔「ん？何が」
メ「前のお前は人間じゃなくーーーー

そして、メガギアは衝撃の真実を告げる。

ーーーー悪魔だったんだ」

焔「・・・・・・・・何・・・・・・・?」

聞いた事の無かった事実を聞かされ、俺は固まった。

第九話　軽く休憩「休む事は大切だ！！」（前書き）

作「前回変な所で切っちゃいました。スンマセン！！」
焔「しっかりしろよ作者」
作「以後気を付けます。あと話は至って普通です。」
焔「あんまり普通なのも良くないぞ？」
作「あまり自分が思ってる様には進んで行かないんですよ。」
焔「まあこんな駄目作者だが今後も宜しく！！」
作「それでは第九話、どうぞ！」

第九話　軽く休憩「休む事は大切だ！！」

メ「・・・どうした？」
焔「いや・・・俺の思ってた事とは違ったからさ」
メ「そうか」
焔「そういえばさ、お前は何でここに来たんだ？」
メ「まあちょっと言い忘れた事があってな」
焔「何？」

メ「お前の仲間は六割悪魔で弐割堕天使だ」

全「えええええええええええええええ！？」
焔「まあ人間が嫌いだったのなら当然だな」
メ「皆にはもう、お前が記憶を失ってるって言っといたからな」
瑞「悲しいです焔王君！！」
美「異性に興味を持ちなさい！！」
焔「悪魔に異性もクソも無いだろ」
雄「まあその位にしてくれないか？ちょっと話がしたいからな」
焔「分かった。それじゃメガギア、この話の続きは俺の家でしよう」

メ「了解だ」
雄「よし、そろそろ昼休みが終わるな。」
明「これからテストがあるから疲れちゃうよ」
雄「で、明久」
明「ん？」
雄「今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告してこい。」
明「断る。雄二が行けばいいじゃないか」
雄「大丈夫だ。Bクラスには美少年好きが沢山いるからな」
明「成程、それなら大丈夫だねっ」
焔「でもお前、不細工だしな・・・」
明「失礼な！！参佰六拾伍度どこからどうみても美少年じゃないか！！」
メ「伍度多いぞ」
秀「実質伍度じゃな」
明「皆嫌いだっ！！」
ダッ↑明久が勢いよく走り出した音

コケッ↑メガギアの影で躓いた音

ゴキュッ↑明久が顔からコンクリートにダイブする音

明「ふぉおおぉっ！？は、鼻が！！鼻が今にももげそうな程痛いいい！！」
メ「油断し過ぎだ。」
焔「コイツは戦争に向いてないな」
明「ち、畜生！！弐人共覚えてろよ！！」
雄「とにかく頼んだぞ～」

焔「俺関係無くね！？」
美「坂本、もうテストが始まっちゃうわよ？」
雄「じゃあそろそろ戻るか。焔王、行くぞ」
焔「ああ、メガギアはどうする？」
メ「暇だからお前のクラスの人間でも観察しようかと思ってる」
焔「くれぐれもバレない様にな？」
メ「わかってる」

そして俺達は、明日のBクラス戦の為にテストで点数を補充した。

ーーーー放課後

明「言い訳を聞こうか」

鞄を片付けていると、明久が雄二に詰め寄っていた。

何か服がエライ事になってるが気にしない！！

雄「予想通りだ」
明「くきいーーーー！！殺す！！殺しきる！！」
雄「落ち着け」
明「ぐほあっ！！」

鳩尾強打！！

焔「お前結構鬼だな・・・」

雄「そうか？まあいい、焔王、帰るぞ」
焔「ああ」
明「待って～置いてかないで～」
焔「しょうがないな、先に帰るぞ」
明「この鬼！！悪魔！！」
焔「冗談だ、早く鞄を片付けろよ」
明「わーい！！待っててね」

雄「へえ、お前優しいな」
焔「だろ？もっと褒め称えていいぜ」
雄「工藤にだけかと思ったんだが・・・」
焔「っ！！」

明「お待たせ～！」
焔「よし、帰るか」

俺は教室のドアを開けた。

第九話　軽く休憩「休む事は大切だ！！」（後書き）

悪魔の名前を壱々紹介するのは正直面倒くさいので、そのまま小説に登場させる事にしました。

第拾話　親友と真友、光の堕天使に会友（前書き）

紅鎖さん、ご意見有難うございます！！他の人も思った事などがありましたらどんどん感想に載せて下さい！！

第拾話　親友と真友、光の堕天使に会友

ガバッ

焔「何だあっ！？」
愛「やっほー、焔王君」
焔「おう、愛子か」
優「ちょ、ちょっと愛子！！何やってんの！？」
焔「あ、ホントだ！！愛子、とにかく離れろ！！恥ずかしくて死にそうだ！！」
愛「ボクずっとこうしていたいな～♪（スリスリ）」
焔「ふ～・・・」
優「落ち着いてんじゃないわよ！！」

バゴオッ

焔「ぐはっ！？」
明「そういえば二人共焔王に何の用なの？」
優「今日一緒に帰ろうと思って来たんだけど」
愛「ちょっと話も交えて」
焔「悪いな雄二」
雄「まあ気にするな。楽しんで来い。それじゃ」
焔「ああ」

明「ねぇ雄二」
雄「何だ？」
明「まさかとは思うけど木下さんまで焔王の事を・・・・・・」
雄「まあさっきの行いを見れば誰でも分かるだろうがな」

明「羨ましいなあ・・・」
雄「・・・お前は色んな意味で鈍感だな」
明「えっ？何が？」
雄「ったく・・・帰るぞ」
明「ちょっと待ってよ！！」

雄二達と別れ、俺は愛子、優子と一緒に帰っている。

優「ねぇ焔王」
焔「何だ？」
優「Ｂクラスに勝ったら・・・次はＡクラスに宣戦布告するんでし

ょ？」
焔「そうだな」
愛「でさ、ちょっと約束してほしいんだよね」
焔「？」

愛「負けた方は何でも一つ言う事を聞くっていうのはどう？」
焔「おう、いいぞ」
優「わ、私も」
焔「優子、何をそんなに慌ててる？」
優「べ、別に何も」
焔「そうか」

そういえばリギンス・・・アイツは何処に居るんだ？メガギアが言うには他にも沢山居るって話だが・・・

？「呼んだか？焔王」

焔「・・・・・・！！」

聞こえた。聞き覚えのある、昔から変わらない懐かしい声が。

愛「今の声って誰？」
優「まさかとは思うけどアンタの知り合い？」
焔「そのまさかだ。」

周りを見渡したが、姿が見えない。ふと、メガギアが言った事を思い出す。

メ（アイツは普段光を曲げて空を飛んだりしてるからな）

焔「何処に居るんだ？」
リ「そうか、見えないんだったな。待ってろ」

そういって、ソイツは目の前に現れた。

焔「よう、リギンス」
リ「久し振りだな」
愛・優「「・・・？？」」

2人は話に着いてこれず、頭上に「？」を浮かべていた。

ーーーーその後

焔「それにしてもよく来てくれたな」
リ「な～に、これぐらい大した事無いさ」

リギンスも加わり、帰路にたっていた。

優「あ、あの～・・・リギンスさん？」
リ「別に敬語じゃなくてもいいぞ」
優「じゃ、じゃあ遠慮なく・・・・・・貴方は人間がすきなの？」
リ「・・・殆どが嫌いだ。だがお前らは問題ないと思ってる」
愛「何で？」
リ「焔王が仲良く出来る奴なら大丈夫だと思ったんだ。」
優「じゃあ私達がこうやって一緒に歩いてるって事自体が珍しいの？」
リ「前のコイツは酷かったな。人間を殺す事を生き甲斐にしてた様なモンだ」
愛「でも意外だな～焔王君がそんなに荒れてたなんて想像つかないや」
優「ホントよね」
愛「あ、ボクと優子はここを右に渡るんだよね」
焔「なら、俺達も一緒にそっち行こうか？」
優「その気持ちは有難いけど、ちょっと話をしたいから今日はいいかな」
焔「そうか。それじゃ」
愛・優「「バイバイ」」

焔「なあ、リギンス」
リ「何だ？」
焔「他にも悪魔や堕天使ーーーー俺の仲間がいるんだろ？」
リ「そうだな」
焔「その記憶を全部引き出す事は出来るか？」
リ「俺は出来ないが・・・他に出来る奴がいる」
焔「誰だ？」

リ「ガンダズクって奴を覚えてるか？」
焔「いいや、全く」
リ「まあいい。ソイツはあくまで自分の知ってる範囲内だが記憶を戻す能力を持ってるんだ」
焔「つまりソイツが知ってて俺が知らない事と言ったら・・・」

リ「お前の仲間の名前だけだな」
焔「じゃあ俺がこれから言う所に明日連れてきてくれないか？」
リ「別に今でもいいんだが、そりゃまあ呼ぶのには少々の時間はかかるが」
焔「だからだよ。ガンダズクって奴に迷惑をかける訳にはいかないからな」

リ「・・・何て言うか、お前かなり変わったな」
焔「ハア・・・前の俺ってそんなに酷かったのか？」
リ「酷いなんてモンじゃなかったな」
焔「そうか・・・処でお前、今日俺ん家に泊まってったらどうだ？」
リ「ますます変わったな」
焔「うっせ」

なんやかんやで、リギンスは既に俺の家に居たメガギアと一泊した。

ーーーー回想

愛「ねぇ優子」
優「なに？」
愛「優子ってさ、焔王君の事好きなの？」
優「な、何を言うのよ！！」
愛「実はボク好きなんだよね～」
優「・・・私も」
愛「焔王君言ってたよ。無くなった記憶を取り戻してもボク等の事は忘れないって。でもそれが完全に合ってるって保証は無いんだよ？」

優「じゃあ私達が努力しなきゃならないって事ね」
愛「ボク等も焔王君の為に頑張らなきゃね」
優「そうね」

ーーーー回想終了

ーーーー翌日

焔「ここが俺の学校だ」
リ「成る程・・・よし分かった。午後に来るからな」
焔「ああ、頼んだ」

そして俺は学校に入った。

第拾話　親友と真友、光の堕天使に会友（後書き）

この辺から徐々に新キャラを出していくつもりです。

オリキャラ設定・弐（前書き）

一応新キャラは全員悪魔か堕天使にするつもりです。リギンスとリリアスクの頭文字が被ってしまうので、リギンスはリで、リリアスクをリリにします。

オリキャラ設定・弐

ガンダズク

別名、夢想の堕天使
誰に対しても常に敬語
ホワイトホールを形成して空間をねじ曲げる
体を光らせる事が出来る
目や口、耳等は無く、顔に十字マークがある
髪は時に剣となり、攻撃や防御に使用する
足は無く、浮いている
普段は優しいが、人間が自分の仲間に出過ぎた真似をするとキレる
因みにキレても敬語

リリアスク

別名、無命の死神
黒い服を着て、黒いフードを被っている
いつも笑っているが、たまに顔が歪む
真ん中に線が入っていて、目と口の色が左右で各々分かれている
手を棘に変えて攻撃する
ガンダズクとは正反対の性格で、大半の人間に冷たく人間を殺すの

が大好き
出現する時は地面から黒煙が上がる

バルログ

別名、炎王鬼神
体が常に燃えている
体型は人型
頭には二本の巨大な角が生えていて、翼が三対ある
顔は白目で口には長い牙が沢山はえている
手が異様に大きく腕は何処までも伸ばせる
体に無数の棘がある
口から火を吹ける

第拾壱話　Bクラス戦「これ早いのか遅いのかよく分からないな」（前書き）

呆気ないと思う方も居ると思います。何か意見等が有りましたらどんどん感想に載せて下さい！！

第拾壱話　Bクラス戦「これ早いのか遅いのかよく分からないな」

雄「さて皆、今日はいよいよBクラス戦だが殺る気は十分か？」

「「「「「「おおおおーーーー！！」」」」」」

焔「なあ、字が違わなくないか？」

とはいえ、この一向に下がる気配の無い士気はFクラスのいい所でもあるか。

雄「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦では絶対に負ける訳にはいかない」

「「「「「おおおおーーーー！！」」」」」

雄「そこで、前線部隊だが姫路と焔王に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んでこい！！」

「「「「「うおおーーーー！！」」」」」

焔「頑張るか、瑞希」

瑞「そうですね」

この時焔王はBクラス戦を速攻で終わらせるつもりでいた。

キーンコーンカーンコーン

雄「よし、行ってこい！！目指すはシステムデスクだ！！」

「「「「「サー、イエッサー！！」」」」」

焔「さて、俺も行くか」

ーーーー渡り廊下

F「いたぞ、Bクラスだ！！」

F「高橋先生を連れているぞ！！」

相手の人数は１０人程度。様子見に来たという事だろうか。

F「生かして帰すなーーーー！！」

物騒な台詞が皮切りとなりBクラス戦が始まった。

B「うわっ！！崇眞焔王だ！！」

焔「え～俺ってそんなに嫌われ者？」

明「いやいや、そういう意味じゃないでしょ」焔「そうなのか」

明「というわけで宜しく！！」

焔「任せろ」

そういって一歩前に出る。

焔「高橋先生。ここにいるBクラスの人全員に総合科目で勝負を申し込む」

「「「「「何だと！？」」」」」

Ｂクラスだけじゃなくｆクラスの人も驚いた。

明「ちょっと焔王！ホントに大丈夫！？」
焔「心配すんなって」

Ｂ「まあいい！」
Ｂ「やってやる！」
Ｂ「覚悟しなさい！」

焔「試獣召喚！！」
「「「試獣召喚！！」」」

総合科目
Ｆ崇眞焔王・７７９２点
Ｂ１０人・１４７３３点

焔「まとまれば高いが大体一人１２００点か」
明「ねぇ、君は何でＦクラスなんだい？」

Ｂ「何だ！？あの点数は！！」
Ｂ「俺達で勝てるのか！？」
Ｂ「くそっ！！皆、とにかく行くぞ！！」

そして１０人全員が突っ込んで来た。

焔「じゃあな」

そういった瞬間、召喚獣の目が十字型に光りーーーー

ドドオッ

ーーーー相手の召喚獣を一掃した

総合科目
Ｆ崇眞焔王・７７９２点
Ｂ１０人・０点

Ｂ「「「「「はあああああああ！？」」」」」

そりゃ驚くよね。

鉄「ほほう、こんなにも戦死者がいるとは」
B「ぎゃあああああ！！」
B「助けてくれええええ」
B「鬼の補習はいやあああああ！！」

Bクラスの前線部隊は鉄人に連れていかれた。

瑞「すいません、遅れちゃいました・・・」
焔「よう瑞希」
瑞「あれ？Bクラスの人がいませんね」
焔「悪いな、俺が全員殺っちまった」
高「やはり貴方がFクラスに居るのはおかしいと思うんですが・・・」
焔「そうかな～」
明「あ、早くBクラスに行かなきゃ！！」
瑞「そうですね」

リ「おい焔王」
明「うひゃあ！！」
焔「ようリギンス」

瑞「だ、誰ですか？」
リ「まあ平たく言えば焔王の友人だ」
焔「お前が来たって事は・・・アイツもいるのか？」

リ「ああ、Fクラスにな」
焔「皆、ここは任せた」

瑞「どうしたんですか？」
リ「コイツは今から用事があるんだ」
明「わかった！後は任せて！」

瑞「用事、早く済ませて下さいね？」

焔「ああ。じゃあリギンス、行こうぜ」
リ「了解だ」

こうして焔王は一度戦場を離れた。

ーーーーFクラス

ガラッ

ガ「久し振りですね。」
焔「お前がガンダズクか」

ガ「はい、そうです。」
リ「じゃあ早速なんだが」

ガ「分かりました」

そういって焔王の前に立つガンダズク。

ガ「では、貴方の仲間の記憶を戻します」

焔「宜しく頼むぞ」

ガ「思考想呼起「リメイク・メモリー」

そう言うと、ガンダズクから放たれた光が焔王を包み込んだ。その間、様々な記憶が焔王の脳裏をよぎって行く。

ーーーー数分後

ガ「どうですか？」

焔「思い出したよ。まあ仲間の事だけだがな」

リ「とにかくこれで用事は済んだな」

ガ「では我々はこれで」

焔「ん？他に用事か？」

ガ「皆を呼んできます。まあ時間はかかりますが」

焔「わかった。じゃあな」

リ「おう」

そして二人は退室した。

雄「ん？焔王か」

焔「よう雄二、今丁度用を済ませたところだ」

雄「そうか」

ガラッ

明「ねぇ雄二。何か変わった事は無かった？」
雄「まあこう見た限りは特に変わってないな」
焔「そういや雄二は何処に行ってたんだ？」
雄「協定を結びたいと申し出があってな。調印の為に教室を空にしていた。
秀「協定じゃと？」
雄「ああ、四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止するってな」
明「それ、承諾したの？」

雄「そうだ」
焔「なに！！じゃあさっさと終わらせに行くぞ！！」
明「え、あ、うん」
秀「じゃあワシも前線に戻るとするかの」

秀「では、くれぐれも気をつけるんじゃぞ！」
焔「お前もな～」
明「秀吉もね！」
焔「じゃあ行くか明久」
明「うん！」

三人は各々の部隊へと向かった。

須「吉井！それに崇眞！戻って来たか！」明「待たせたね！状況は？」
須「かなりマズイ事になってる」

焔「何でだ？」
須「島田が人質にとられた」
明「なっ！？」
焔「とりあえず状況を見たいんだが」
須「それなら前に行こう」

須川と共に人垣を抜けると、そこには二人のBクラス生徒と捕らえられた美波及び召喚獣の姿があった。

明「島田さん！」
美「よ、吉井！」
焔「何かドラマみたいだ」
B「そこで止まれ！それ以上近寄るなら召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにするぞ！」
明「総員突撃用意ぃーーーー！！」
焔「おい明久！？」
須「隊長それでいいのか！？」
B「ま、待て吉井！！」
B「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

明「馬鹿だから」
美「殺すわよ」
B「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら部隊を離れて

一人で保健室に向かったんだよ」
明「島田さん・・・」
美「な、何よ」
明「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か！！」
美「違うわよ！！」
焔「やれやれ、見ていられねぇなあ・・・」

そういって焔王は静かに召喚獣を呼び出し、神流豌を使った。

英語W
F崇眞焔王・６３８点
B鈴木二郎・０点
B吉田卓夫・０点

B「っ！？」
B「急に腕が！！」
鉄「戦死者は補習ーー！！」
B「いやあああ」
B「助けてええ」
明「ナイス焔王！」
焔「まあ俺の事はいいから美波の所に行ってやれ」
明「あ、そうだね」

明「島田さん、大丈夫だった？」

美「・・・・・・」
明「無事でよかったよ。心配したんだからね？」
美「・・・・・・」明「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

美「・・・・・・」
明「あー、島田さん、実はね」

美「・・・何よ」
明「僕、相手を騙すために嘘をついてたんだよ？」

殺されかけた。

明「・・・ここは何処？」
瑞「あ、気が付きましたか？」
焔「そりゃ気絶するだろ。明久は散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたんだからな」
ム「・・・（トントン）」
雄「お、ムッツリーニか。何か変わった事は無かったか？」

焔「何？Cクラスの様子が怪しいだと？」
ム「・・・（コクリ）」

雄「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言って脅せば俺達に攻め込む気も無くなるだろ」
焔「じゃあ今から行くか」
そんなわけで、途中に会った須川と美波を含めレギュラーメンバーでCクラスに向かった。

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は居るか？」
？「私だけど何か用？」
焔王達の前に現れたのは小山友香。混じりっ気のない黒髪をベリーショートにした気の強そうな女子だ。
雄「ああ、不可侵条約を結びたい」
友「不可侵条約ねぇ・・・どうしようかしらね、根本君？」
恭「当然却下。だって必要ないだろ？」
明「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」
焔「なあ明久、あの根本って奴がBクラス代表なのか？」
明「そうだよ」
恭「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」
明「何を言ってーーー」
恭「先に協定を破ったのはソッチだからな？これはお互い様だよな！」
根本が告げると同時に取り巻きが動き出す。そしてその背後には長

谷川先生が立っていた。

焔「先生がいたか。コイツは都合がいいな」

雄「おい何してる！？逃げるぞ焔王！！」

焔「長谷川先生！！ここに居るＢクラス全員に数学勝負を申し込む！！」

長「いいんですか！？」

須「崇眞なら行けるか」

Ｂ「げっ！崇眞だ！！」

恭「何！？」

皆が言葉を言う前に焔王の召喚獣の目が光った。

数学

Ｆ崇眞焔王・７１１点

Ｂ多数・０点

皆驚きのあまり声も出せないでいた。

恭「こ、こんな力があるなんて・・・」

焔「くたばれ」

数学
Ｆ崇眞焔王・７１１点
Ｂ根本恭二・０点

焔「なあ、こういう場合ってどうなるんだ？」
長「し、勝者Ｆクラス！！」

こうして、Ｂクラス戦が終わった。

第拾壱話　Bクラス戦「これ早いのか遅いのかよく分からないな」（後書き）

これ作成するのにかなり時間がかかりました。もうヘトヘト・・・

第拾弐話　そして今、死神達と相対す（前書き）

ここで彼等が登場します。それでは拾弐話、どうぞ。

第拾弐話　そして今、死神達と相対す

焔「何か呆気なかったな。・・・ん？どうした？」

皆はと言うと、口を大開けして固まっている。

明「いや、だってさ・・・」

雄「何て言うか、その・・・お前凄いな」

美「何なのよあの召喚獣は・・・」

ム「・・・・・・強すぎ」

瑞「でもよく見たら結構可愛かったですね」

秀「姫路よ、問題はそこではないじゃろう」

皆はまだキョドっている。そりゃそうだよな、目の前であんな事されたら普通はこうなる。

不意に、根本が話し掛けて来た。

恭「ったく、何で崇眞がここに居るんだよ」

焔「俺がここに居ちゃいけないのか？」

根本はふて腐れた表情をしている。逆に返り討ちに遭っての事だろうか？まあ自業自得だから俺は特に気にしないけど。

恭「うちのクラスの奴を使ってお前を帰らせる筈だったんだ。」

焔「最低だなおい」

恭「何だ？知らなかったのか？」

焔「ああ」
恭「じゃあアイツ等は一体何処に・・・」
メ「それならここだ」
床が黒に染まり、何故かメガギアが現れた。
恭「何だお前？」
メ「てめぇが卑怯者の主格か？まあいい、コイツ等はお前の仲間だろ？」
そう言ってメガギアは影から数人の男子生徒を出して根本の所に放り投げる。
恭「お前何しやがった！？」
メ「校内を彷徨いてる時にソイツ等を見掛けてな。Fクラスがどうのこうの言ってたから軽くいたぶってやった。」
恭「チッ！設備の妨害も失敗してたのか！」
明「別に教室は普通だったしね」
焔「さてと、じゃあ雄二、どうするよ？」
雄「まあ今日は時間が無いから明日といこう」
焔「だそうだ、根本」
恭「チッ、分かったよ」
俺達は鞄を取りにFクラスへ向かった。

ーーーーFクラス

ガラッ

焔「悪いな二人共、待たせちまったか」
リ「いや、丁度今来たトコだ」
ガ「貴方は何か用事が有ったのですか？」
焔「まあそうだな」
雄「ん？お前等も焔王の知り合いなのか？」
リ「そんなトコだな」ガ「ガンダズクと申します。以後、お見知り置きを」
雄「俺は坂本雄二だ」
明「吉井明久です」
美「島田美波です」
瑞「姫路瑞希と言います」
秀「木下秀吉じゃ」
ム「・・・土屋康太」
雄「いや～、しかし悪魔に自己紹介されるとはな」
メ「一応言っとくが俺達四人は全員堕天使だ」
ガ「焔王。まだあと二人居ますので取り合えず外に行きましょう」
焔「そうだったな」
瑞「え、あと二人いるんですか？」

秀「気になるのう」
美「じゃあ早く鞄片付けなくちゃね」

その後、皆で外に出てみると何やら話し声がするのに気付いた。

？「ったく、こんな変な人間久し振りだ」

声のした方を見ると、そこには一人の悪魔とーーーー

愛「ボクは別に普通だよ」

ーーーー愛子が居た。

リリ「ん？」

向こうは俺に気付き、目が合った。ガンダズクに記憶を戻してもらったから、名前はすぐに分かった。

焔「リリアスクか」
リリ「久し振りだな」
愛「やっぱりこの人も知り合いだったんだね」
焔「ああ」
明「君は悪魔なの？」
リリ「そうだな」
メ「コイツは人殺しが趣味という薄汚い性格の持ち主なんだ」
リリ「薄汚いってお前」

瑞「人殺しですか！？」
美「こ、殺されちゃうわ！！」
リリ「安心しな。お前達は殺さない。焔王と仲良くしてるからな」
瑞「よ、よかったですう・・・・・・」
美「ウチもうダメかと思っちゃった・・・」
明「ねぇ、もう一人は？」
リリ「ああ、アイツには今隠れてもらってる」
明「一体何処ーーーー」

その時、硝子が割れる様な音が聞こえたかと思うと、空間に亀裂が生じた。

リリ「噂をすれば、だ」
明「え？え？」

突如、その亀裂から大量の炎が漏れる様に噴き出てきた。

メ「お前ら、離れとけ」
雄「何でだ？」
メ「アイツが今纏ってる炎の温度は最高で摂氏７０００度だぞ」
雄「何だとっ！？」
美「早く言いなさいよ！！燃えちゃうでしょ！！」
メ「悪い悪い」

雄二達が下がった直後、亀裂から何かが飛び出し、丁度皆の真ん中に着地した。

ガ「焔王、彼が誰だか分かりますね？」
焔「勿論さ」

俺はソイツに近付き、名前を呼んだ。

焔「・・・バルログ」
バ「ヒサビサニアエタナ」
焔「お前、全く変わってないな」

バ「オマエハサイボーグニナッチマッタンダロ」
焔「まあそうだな」
バ「・・・ン？」

明「え？何？」
バ「ニンゲンカ」

バルログが明久達を見つけるなり、更に炎を出した。
リ「おい落ち着けよバルログ、焔王の友人だぞ？」
バ「・・・ナライイ」

リギンスにそう言われ、炎を弱めるバルログ。

明「あ～、ビックリした」

秀「焔王の友人はおっかないのが多いのう」
ム「・・・・（コクコク）」
愛「そういえば・・・ねぇ焔王君」
焔「ん？何だ？」
愛「実は今日優子も待ってたんだよ？」
焔「そうだったのか・・・分かったよ」
愛「ボクが代わりに言っておくね」
焔「いや、俺が言っとくよ」
愛「ふ～ん、分かった」
焔「で、お前は何で待っててくれたんだ？」
愛「言いたい事があるから言わせて」
焔「おう、いいぞ」
すると、愛子はほんのりと顔を赤らめて、
愛「いつか絶対ボクのモノにしてみせるからね」
小さな声でこう言った。

焔「ん？よく聞こえなかったんだが・・・」
愛「それだけ！じゃあね♪」

そう言い残し、愛子はそそくさと走り去っていった。

雄「工藤との用事は済んだのか？」
焔「ああ」

しかし聴覚のいい俺でさえ聞き取れなかったなんて、愛子はどれだけ声が小さかったんだ・・・？

リリ「焔王」
焔「何だ？」
リリ「暇になったらお前ん家に寄らせてもらうぞ」
焔「いつでも来い」
ガ「処で焔王。貴方はあの子が好きなのですか？」
焔「んなっ！？」
リ「それは俺も気になる」
メ「アイツはきっとお前の事が好きだと思うぞ」
リリ「人間嫌いだったお前がもうそんな事を・・・」
焔「ちょっと待て！！色々大事なステップが飛んでるがそんな事はどうでもいい！！愛子とはまだそんな関係じゃないからな！？」
雄「おい焔王、早くこっち来いよ～」

焔「ほら!!雄二がお呼びだぞ!!」

「「「「「・・・・・・チッ」」」」」

焔「今舌打ちした?」

そういった形でその日は幕を閉じた。

第拾参話　犯罪者と共犯者には死の鉄槌を！！（前書き）

気付けば総合アクセス１００００突破！！これも一重にこの小説を読んで下さっている皆のおかげです！！これからもよろしくお願いいたします！！

第拾参話　犯罪者と共犯者には死の鉄槌を！！

雄「今から俺が考えた作戦を実行する」

翌朝、登校した俺達に雄二は開口一番そう告げた。

明「作戦？Ｂクラスはもう倒したでしょ？」

焔「Ｂクラスじゃなくて Ｃクラスの方だろ？」

雄「そうだ」

明「あ、成る程。それで何をすんの？」

雄「秀吉にコイツを着てもらう」

雄二が取り出したのは女子の制服。

焔「雄二、勝手に秀吉の制服を取っちゃいかん」

秀「ワシは男じゃぞ！？」

焔「で、コレを着させて何をする気だ？」

秀「ワシの台詞を華麗に無視するでない！！」

雄「秀吉には木下優子として、Ａクラスの使者を装ってもらう」

そういえば優子に一言言うのを忘れてた。

雄「と、言うわけで秀吉。用意してくれ」
秀「う、うむ・・・」
おいおい、こんな所で着替えたら皆が・・・
ム「・・・・・・!!（パシャパシャパシャパシャパシャ!!）」
明「ムッツリーニ!!後でその写真を売ってほしい!!」
焔「オイ明久。本音が出ちまってるぞ」

秀「よし、着替え終わったぞい。ん?皆どうした?」
雄「さあな?俺にもよく分からん」
秀「おかしな連中じゃのう」
焔「じゃ、そろそろCクラスに行くか」
雄「そうだな」

ーーーーCクラス

雄「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

秀「気が進まんのう・・・」

雄「そこを何とか頼む」

秀「むう・・・、仕方ないのう・・・」

雄「悪いな。とにかくアイツ等を挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前なら出来る」

秀「はあ・・・あまり期待はせんでくれよ・・・」

ガラガラガラ、

秀「静かにしなさい、この薄汚い豚共!!」

うわあ・・・

焔「流石だな、秀吉」

明「うん。これ以上はない挑発だね・・・」
友「な、何よアンタ！！」
この声は小山か。
秀「話し掛けないでよ、豚臭いから」
酷いなオイオイ。
友「アンタ、Ａクラスの木下ね？ちょっと点数いいからってイイ気になってるんじゃないわよ！！一体何の用よ！！」
秀「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴方達なんて豚小屋で充分だわ！！」
友「なっ！言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですって！？」
秀「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの」
この学園は演劇部が異常なんだな。他の部活はよく分からないが。
秀「丁度試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近い内に私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！」
そう言って、秀吉が出てきた。

焔「やって良かった的な顔してるぞ」
秀「ついつい熱が入ってしまってのう」
雄「ああ、素晴らしい仕事ぶりだったぞ」
友「Fクラスなんて相手にしてられないわ！！Aクラス戦の準備を始めるわよ！！」
雄「作戦も上手くいった事だし、そろそろ戻るか」
明「そうだね」

焔「じゃあBクラスはどうするんだよ？」
雄「時間が無いから放課後になるな」
焔「そうか、分かった」

俺達は一度教室に帰った。

ーーーー昼休み

優子と会う為、俺はAクラス前に来ている。

焔「アイツ、怒ってるだろうなあ・・・」

ガチャッ、

焔「邪魔するぞ」

メ「邪魔するなら帰って」

焔「へ～い・・・」

そう言い残し、ドアを閉める。ってちょっと待った！！

焔「メガギア！！テメェ何でこんな所に！？」

メ「ハッハッハ」

愛「焔王君って結構ノリがいいんだね♪」

焔「愛子まで！？」

愛「いや～、ゴメンゴメン。優子ならソコだよ？」

愛子が指差す方を見ると、椅子に座っている優子が見えた。

焔「じゃあ一言言って来るから」

メ「おう」

愛「うん」

焔「よう優子」

優「あら焔王。何の用？」

焔「昨日の件で謝っておきたくてな」

優「べ、別にいいわよ。私だって昨日用事があったから早く帰った

だけだし」
焔「ふ～ん、そうか」
優「それよりもさ」
焔「なに？」
優「焔王って女装したら結構イケそうよね」
焔「っ！？」

優「ねぇ、一回だけでもいいから女装してよ」
焔「それで俺が快く引き受けると思うか？」
優「うん」

焔「断る！！」
優「・・・・・・」
焔「待て優子。何故に俺の腕を掴む？」
優「じゃあアタシに謝る代わりに女装してね」
焔「いやそれとこれとは話が別だと・・・ん？」
優「女装する気になった？」

焔「そんなにお前は俺の女装が見たいのか？」
優「ええ、凄く」
愛「ボクも見たいな～」
焔「よし。じゃあ二人共」
優・愛「「うん」」

焔「諦めるんだ」

シュッ↑俺、猛ダッシュ

優「ちょっと、待ちなさいよ！！」

愛「焔王君、何で足を使わずに進んでるの？」

優「愛子、今はそこじゃないでしょ！？」

どうやって進んでるかって？これは昨夜作った新兵器、不浮速進道（フェアリングロード）だ！！

ガッ↑ドアノブに手を掛ける音

バン、ガスッ↑ドアが勢いよく開き、顔に直撃する音

ピュ～↑俺が吹き飛ばされている音

ドサッ↑愛子と優子の足元に落ちる音

「「「・・・・・・・」」」

リ「焔王だったか。良かった良かった」
焔「何が良かったって？」
リ「まあそう怒るなよ」
焔「取り合えず謝れ」
リ「ヤダ」
焔「ガキかお前は」
愛「ねぇ、何で来たの？」
リ「時計を見な」

リギンスに言われて三人で時計を見ると、あと数分で授業が始まる程にまで迫っていた。

焔「じゃあそろそろ戻るか。二人共、じゃあな」
愛・優「女装は？」
焔「無い」

そして俺達は、一度教室に戻った。

ーーーー放課後、Bクラスにて

雄「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」
恭「・・・分かってるよ」

随分と元気ねぇなオイ。

雄「本来なら設備を明け渡してもらい、お前等には素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二がそう言うと、Ｆクラスの皆がざわめき始めた。当然だ、Ｂクラスに勝ったのに設備を入れ換えないなら普通はそうなる。

雄「落ち着け皆、俺達の目標はＡクラスだろ？」
恭「・・・条件は何だ」
雄「条件？それはお前だよ、負け組代表さん？」
恭「俺、だと？」
雄「ああ、お前がコレを着てＡクラスに戦争の準備があると伝えてこれば、設備は見逃してやる」

そう言って雄二が取り出したのは、女子の制服。

Ｂ「絶対にやってみせる！！」
Ｂ「私達に任せて！！」
Ｂ「それで俺達の設備が変わらないのならやらない手は無いな！！」

恭「おい待て！！俺はそんなふざけた事をーーーー」

ズドンッ

反対していた根本をBクラスの奴が殴って気絶させていた。グッジョブ！！

雄「さて、じゃあ皆、後は頼んだぞ」

B「「「「「ハイ！！」」」」」

根本は他の奴に信用されてない様だな。さて、じゃあ俺も帰るかな。

第拾四話　最終決戦の下準備と戦前交渉（前書き）

※お知らせ

申し訳ありません！重大なミスを犯してました！焔王はサイボーグになる前は堕天使だったので、親は最初から居ませんのでそこの所を御了承下さい！！

第拾四話　最終決戦の下準備と戦前交渉

点数補給のテストを終えた二日後の朝、いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺達は、もうじき御別れになる予定のFクラスで最後の説明を受けていた。

雄「いよいよAクラスとの決戦だが、これは一騎討ちで決着を着けたいと思っている」

F「どういう事だ？」

F「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

F「それで本当に勝てるのか？」

焔「まあお前等、取り合えず落ち着けよ」

雄「やるのは当然、俺と翔子だ」

翔子って言うとあの霧島翔子か？学年主席の？

明「馬鹿の雄二が勝てるわけーーーー」

シュッ↑雄二が明久にカッターを投げた音

バゴォッ↑俺がカッターを爆発させた音

ドゴゴッ↑爆炎が明久を巻き込む音

焔「大丈夫か明久」

明「焔王のせいで被害が拡大したよ」

雄「確かに翔子は強い。まともにやり合えば勝ち目は無いかもしれない」

そこで認めるならカッターを投げつけなくても良かったと思うんだが？

雄「だがそれはDクラスもBクラスも同じだっただろう？まともにやり合えば俺達に勝ち目は無かった」

確かにアイツ等はザコかったな。

雄「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

あれだけクラスをまとめあげてきた雄二の言葉だ。否定する奴なんて居ないだろう。

雄「俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を皆にみせてやる」

「「「「「おおぉーーーー！！」」」」」

雄「それで具体的なやり方だが・・・一騎討ちではフィールドを限定する」
秀「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」
雄「日本史だ」

はて？雄二って日本史が得意教科だったか？

雄「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限有り、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」
明「どういう事？そのレベルだと二人共満点を取って引き分けになるじゃないか」

雄「安心しろ勝算はある。　翔子は、一度教わった事は必ず覚えるんだ」
焔「それじゃあ記憶力勝負の日本史はますます不利じゃないか？」
雄「いや、そこが落とし穴だ。翔子は大化の改新を６２５年と、間違ったまま覚えてるんだ」
明「待った！大化の改新って６２５年じゃないの？」
雄「無事故の改新６４５年だ！この情報は本物だ、信用しろ明久」
焔「まあお前がそう言うなら信用するか」
雄「必ずやＡクラスのシステムデスクを俺達の物にしてやる！！」

「「「「「おおぉーーーー！！」」」」」

ーーーーAクラス

優「一騎討ち？」
雄「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」
優「何が狙いなの？」
雄「勿論俺達Fクラスの勝利が狙いだ」
優「分かったよ。何を企んでるのか知らないけど、代表が負けるなんて有り得ないからね。その提案受けるよ」

明「え？本当？」

意外とあっさりしてるな。俺との約束があるからか？
優「でも、此方からも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎討ち五回で三回勝った方の勝ち、って言うのなら受けてもいいよ」

焔「成る程。こっちから瑞希が出てくる可能性を警戒してるんだな？」
明「君もだと思うよ」
雄「安心してくれ。ウチからは俺が出る」
優「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」
雄「そうか。それなら、その条件を呑んでもいい」
優「ホント？嬉しいな♪」
雄「けど、勝負する内容は此方で決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

優「え？う～ん・・・」

またしても考え出す優子。まあコレがＡクラスの設備に関わってくるんだから当然の反応か。

翔「・・・受けてもいい」

明「うわっ！」

翔「・・・雄二の提案を受けてもいい」

いきなり翔子が現れた。それにしてもコイツは気配を消すのが得意なんだな。

優「あれ？代表、いいの？」

翔「その代わり、条件がある」

優「条件？」

翔「・・・うん」

頷いて、翔子は雄二を見た後に瑞希を値踏みするかの様にじっくりと観察した。・・・はて？

翔「・・・負けた方は何でも一つ言う事を聞く」

アイツは雄二と瑞希を見ていたが何をするつもりだ？

優「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはウチで決めさせて？」

焔「別にいいだろ雄二」

雄「ああ。交渉成立だな」
明「ふ、二人共！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」
焔「何言ってんだお前？」
雄「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」
翔「・・・勝負は何時？」
雄「そうだな。十時からでいいか？」
翔「・・・分かった」
雄「よし、交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」
明「そうだね」

焔「しかし、案外早めに終わったな」
明「ん？何が？」
焔「交渉だよ。これじゃＣクラスやＢクラスを使う必要は無かったんじゃないか？」
雄「だな。向こうにも何か策があるのか」
明「取り合えず今はＡクラス戦に集中しよう」
焔「そうするか」

待ってろよシステムデスク！！

第拾伍話　Aクラス戦「おい、ちょっと！！俺等の頑張りは！？」（前書き）

作「ついに来ましたAクラス！！」

焔「やっとだな」

リ「処で作者。何で俺達を呼んだんだ？」

作「今回君達の出番が無いからという作者からの思いやりだな」

「「「「「・・・・・・」」」」」

作「どったの？皆して」

焔「御愁傷様」

「「「「「馬鹿にすんじゃねぇっ！！」」」」」

作「ギャアアアア！！」

焔「コイツ等を相手によく言ったな」

第拾伍話　Aクラス戦「おい、ちょっと！！俺等の頑張りは！？」

ーーーーAクラス

高「では両名共、準備は良いですか？」

雄「・・・ああ」

翔「・・・問題ない」

因みに、一騎討ちの会場はAクラス。そりゃ皆綺麗な所でやりたいだろうから当然だよな。

高「それでは一人目の方、どうぞ」

優「アタシから行くよっ」

お、あっちは優子か。

秀「ワシがやろう」

こっちは秀吉か。そういや優子は今も怒ってるのか？

優「処でさ、秀吉」

秀「なんじゃ？姉上」
優「Ｃクラスの小山さんって知ってる？」
秀「はて、誰じゃ？」

あ、キレてる。

優「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」
秀「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

こりゃ秀吉の命が危ないな。

秀『姉上、勝負はーーーーどうしてワシの腕を掴む？』

優『アンタ、Ｃクラスで何をしてくれたのかしら？どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしている事になってるのかなぁ？』
秀『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測してーーーーあ、姉上っ！ちが・・・！その関節はそっちには曲がらなっ・・・！』

ガラガラガラ

優子が帰ってきた。あら？秀吉は？

優「秀吉は急用が出来たから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」
雄「い、いや・・・ウチの不戦勝で良い・・・」
にこやかに笑っている優子は可愛いんだが、服に付いてる返り血が異様に恐ろしく見える。
高「そうですか。それではまずＡクラスが一勝、と」
高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁一面の大きなディスプレイに結果が表示された。

生命活動
Ａ木下優子・ＷＩＮ
Ｆ木下秀吉・ＤＥＡＤ

アイツ死んだのか！？

高「では、次の方どうぞ」
佐「私が出ます。科目は物理で御願いします」
佐藤美穂か。アイツも結構イケる口なのか？
雄「よし、頼んだぞ明久」
明「え！？僕！？」

明久か。じゃあ一発励ましてやるとしよう。
焔「大丈夫だ。俺達はお前を信じてる」
明「ふぅ・・・それは僕に本気を出せって事？」
雄「ああ、もう隠す必要は無いだろう。皆にお前の本当の力を見せてやれ」
明「やれやれ、しょうがないな」
佐「貴方・・・まさか！！」
明「御名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」
佐「それじゃ・・・貴方は！！」
明「そう。今まで黙ってたんだけど実は僕・・・左利きなんだ！！」

物理
A佐藤美穂・３８９点
F吉井明久・６２点

低っ！！

美「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」
明「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」
ん？アイツ何時から美波の事名前で呼ぶ様になった？後で聞いてや

るか。

雄「勝負はここからだ」

焔「本気で行くぞ！」

明「ちょっと待った！二人共僕を全然信頼してなかったでしょう！？」

雄「勝つ方に信じていた訳じゃない！！」

焔「信頼？何ソレ？脂が乗ってて旨いの？」

明「お前等に本気の左を使いたい！！」

しかしヤバいな。ここからは一敗も出来ない。

高「それでは、三人目の方どうぞ」

瑞「それでは、行ってきます！」

明「行ってらっしゃい」

瑞希が来たか。さて、向こうは誰が来るんだ？

利「では、僕が相手をしよう」

そう言って現れたのは久保利光。学年次席という事で有名だが・・・まあ瑞希なら問題ないだろ。

高「科目はどうしますか？」

利「総合科目で御願いします」

明「ちょっと待った！何を勝手にーーーー」
瑞「構いません」
明「姫路さん？」
焔「いいじゃねぇか」
明「焔王まで！？」
高「それでは・・・」

高橋先生が前と同じ様に操作を行う。
各々の召喚獣が呼び出され、一瞬で決着がついた。

総合科目
Ａ久保利光・３９９７点
Ｆ姫路瑞希・４４０９点

明「凄いよ姫路さん！！」
焔「流石だな」
Ａ「マ、マジか！？」
Ａ「いつの間にこんな実力を！？」

至る所から驚きの声が上がる。そりゃそうだ、学年次席に点数差４００オーバーだからな。

高「これで二対一ですね。次の方は？」
焔「雄二。俺に行かせてくれないか？」
雄「元からそのつもりだ。存分にやってこい」
焔「分かった」

俺の相手は誰だ？

愛「じゃ、ボクが行こうかな」

一番関わりの有る、愛子だった。

焔「お前か。大体予想はついてたけどな」
愛「ボクも焔王君が出てくると思ってたよ」
高「教科は何にしますか？」
と、高橋先生は俺に聞いてきた。しかし俺は、

焔「愛子、お前が決めていいぞ」

愛「え、いいの？じゃあ、保健体育で」
高「分かりました」
焔「お前は保健体育が得意なんだな」

愛「うん。焔王君は？」
焔「俺の場合、得意も不得意も無いからな」

保健体育
Ａ工藤愛子・４４６点
Ｆ崇眞焔王・６３２点

愛「・・・え？」
明「凄いよ焔王！！保健体育だけで僕の総合科目並の点数だよ！！」
焔「どんだけ低いんだ」
ム「俺よりも高い・・・」
愛「流石焔王君。なかなかやるね」
焔「お前も高い方だろ」
愛「でもボク、負ける訳には行かないんだよね」
焔「俺だって同じだ」
愛「それじゃ行くよ！」

先に動いたのは愛子の召喚獣。巨大な斧を持って一気に間合いを詰める。

ガキイィィン！！

愛子の召喚獣の攻撃は、暗黒地帯（ダークエリア）によって遮られた。

愛「・・・っ！！」

愛子が召喚獣を下がらせた隙に、光破撃線（ソルビーム）を打ち込む。

愛子の召喚獣の足元が光り、そこから十字型の爆柱が上がった。

愛「おっとっと」

しかし愛子の召喚獣はそれらを全てかわしきった。

愛「じゃあ腕輪でも使おうかな」

そう言って愛子は召喚獣に指示を出す。すると雷電を纏いながら突進してきた。

焔「（何か策でも考えたか・・・？）」

そう思った瞬間、愛子の召喚獣が目の前に居た。

バリイイィン！！

焔「なっ！？」

暗黒地帯(ダークエリア)が破られた。十枚有る内の六枚が一瞬で。

すると愛子の召喚獣は再び暗黒地帯(ダークエリア)を破り始めた。

焔「なかなかやるな」

召喚獣に指示を出して、腕を収縮させる。

バシュッ！！

全て破られた所で神流腕(ギルアーム)が炸裂した。

保健体育

Ａ工藤愛子・２５６点

Ｆ崇眞焔王・６３２点

焔「まさかアレを破るとはな。よくやるよ」
愛「でも、もうあの壁は使えない筈！」

そうして愛子の召喚獣が再度突進する。しかし愛子はミスを犯していた。

焔「愛子」
愛「何？」
焔「お前の言ってた壁なんだがーーーー」

一呼吸入れて一言。

焔「ーーーー何枚でも展開出来るんだ」

腕輪を光らせ、六本の腕から暗黒地帯（ダークエリア）を出現させ、愛子の召喚獣に向けて一気に打ち出した。

愛「え！？」

愛子の召喚獣はかなりの勢いがついていた為、急にはかわせない。

焔「終わりだ」

結果、全ての攻撃が愛子の召喚獣に命中した。

保健体育
Ａ工藤愛子・０点
Ｆ崇眞焔王・６３２点

焔「悪いな愛子」
愛「・・・別にいいよ。だってコレは戦争だもん」

「「「「「おおおおーーーー！！」」」」」

高「これで二対二です」

高橋先生の顔にも若干の変化が見られた。当然だ。Ｆクラスが Ａクラスと渡り合ってるからな。

美「やっぱり焔王って強いのね」

焔「偶々だって」

明「でもこれで同点まで追い上げたね！」

高「最後の一人、どうぞ」

翔「・・・はい」

雄「俺の出番だな」

クラス代表同士の決戦。

高「教科はどうしますか？」

雄「教科は日本史、内容は小学生レベル、方式は１００点満点の上限ありだ！！」

A「上限ありだって？」

A「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

A「注意力と集中力の勝負になるぞ・・・」

高「分かりました。それでは問題を用意してきます。少し待っていて下さい」

明「雄二、後は任せたよ」

雄「ああ。任された」

焔「しっかりやれよ」

雄「分かってる。お前もよくやってくれた」

焔「なに、当然だ」

ーーーー視聴覚室

高「では、始めて下さい」

合図が送られると同時に、二人がテストを始めた。

瑞「これであの問題が出ていたら・・・」

明「うん。僕達の勝ちだ」

俺達はAクラスのモニターから見ている。しばらくしてディスプレイに問題が映し出された。

《次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。》

（　　）年　平城京に遷都

（　　）年　平安京に遷都

この範囲なら出ているか・・・・・？

（　　）年　鎌倉幕府設立

（　　）年　大化の改新

明「あ・・・！」
焔「出たな」
美・瑞「っ！！」

キーンコーンカーン

下校のチャイムが鳴った。もうそんな時間か。

高「それでは、限定テストの結果を発表します」

翔子がアレを間違えたなら満点じゃない筈だ。

高「Ａクラス代表、霧島翔子！」

さてさて・・・

高「９７点！」

明「やったあ！」

焔「翔子が満点を逃したぞ！！」

美「これであの豪華な設備がウチ等の物になるのね！」

瑞「吉井君！」

明「うん！」

高「続いて、Ｆクラス代表、坂本雄二！」

「「「「「うおおおお！！」」」」」

いいっていいって。どうせアイツは１００点なんだからな。やったぜ！！

高「５７点！」

・・・・・・は？

「「「「「「・・・・・・・え・・・・？」」」」」」

Ｆクラスの卓袱台が、みかん箱になった。

第拾伍話　Aクラス戦「おい、ちょっと！！俺等の頑張りは！？」（後書き）

どうだったでしょうか？少々原作とは違いましたが、楽しんでいただければ幸いです。

第拾六話　戦後処理と運命の行く末に何を見る（前書き）

今回で小説一巻が終了します。

第拾六話　戦後処理と運命の行く末に何を見る

高「三対二で、Ａクラスの勝利です」

完敗だ。

翔「雄二、私の勝ち」
雄「・・・殺せ」
明「いい度胸だ殺してやる！！歯を喰い縛れ！！」
瑞「吉井君落ち着いて下さい！！」
美「アキ！アンタだったら半分も取れないでしょ！」
明「それについては否定しない！」
瑞「じゃあなおさら坂本君を責めちゃダメです！！」
明「くっ、二人共何故止めるんだ！！コイツには喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！！」
瑞「それは体罰じゃなくて処刑です！！」
焔「なあ美波」
美「なに？」
焔「何時から明久の事をアキって呼ぶ様になった？」
美「何時って、今日アンタが来る前だけど？」
焔「ふ～ん・・・」

よし、聞きたい事は聞いたし今俺の邪魔をする奴も居ない筈だ。

焔「おい雄二」

雄「どうした焔王」

焔「怒らないから正直に答えてくれよ」

雄「分かった」

焔「あの点数は何だ？」

雄「いかにも、俺の実力だ」

焔「呆れて物も言えんな・・・・・・」

雄「・・・悪かった」

翔「・・・でも危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ負けてた」

雄「・・・言い訳はしねぇ」

図星かコイツ。

翔「・・・ところで約束」

約束？ああ、そういや何でも言う事を聞くって約束したんだっけ？

ム「・・・・・・・！！（カチャカチャカチャ！）」

何か明久とムッツリーニが二人仲良くカメラの準備をしてるんだが・・・

雄「分かっている。何でも言え」

本当に分かってるかどうか知らないが。

翔「・・・雄二、私と付き合って」

・・・・・・は？

雄「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」
翔「・・・私は諦めない。ずっと雄二の事が好き」

成る程な～翔子は雄二に一途だったのか。

雄「拒否権は？」
翔「・・・無い。約束だから。今からデートに行く」
雄「あ、いや待て、おい、それはーーーー」

雄二が何か取り繕うとしたその時、

バシンッ！！

雄「ゴァハッ！？」

ドタッ

グイッ、ツカツカツカ

強烈な一撃を浴びせられて気絶した雄二の首根っこを掴み、翔子は教室を出ていった。

美「それじゃアキ、クレープ食べに行こっか！」

明「えぇっ！？それは週末って話じゃーーーー」

美「週末は週末、今日は今日！」

明「そ、そんな！二度も奢らされたら次の仕送りまで僕の食費が！」
瑞「ダメです！吉井君は、私と映画を観に行くんです！」
明「えぇっ！？姫路さん、それは話題にすら上がって無いよ！？」
瑞「はい！今決めました！」
美「ほ、ほらアキ！クレープ食べに行くわよ！」
瑞「どんな映画に連れて行ってくれますか？」
明「そんなー！」

・・・向こうでも何かやってるし・・・

優「か・げ・ろ・う？」
焔「やっと来たか」
愛「ボクも居るよ」
焔「分かってるって」
優「その・・・約束なんだけど・・・」

優子の奴、やけにモジモジしてるな。一体何を企ん・・・ってまさか！！俺に女装させるつもりか！？

優「か、焔王！」

畜生！！雄二がもっと真面目にやってりゃこんな事にはならなかったのに・・・！！確かにコイツ等は前から俺の女装を夢見てたんだろうがーーーまあ、今は人があまり居ないからその分マシか・・・

優「アタシと付き合いなさい！！」

あれ？俺の予想とは遥かに違う返事が・・・

焔「そ、そうか。分かった」

愛「じゃあ今度は焔王君の番だね」

焔「？何で俺が？」

愛「だってボク、焔王君に負けちゃったし」

焔「何だ？クラス単位じゃなかったのか」

優「アタシもそう言ったんだけど、愛子がどうしてもって聞かなくて」

焔「ふ～ん・・・いいだろう。愛子がそう言うなら俺の用件を一つ聞いて貰うぞ」

愛「うん」

焔「俺達はこれから映画を観に行くんだが」
愛「うん」
焔「一緒に来ないか？」
愛「勿論！」
優「やっぱりね。焔王ならそう言うと思ったわよ」
愛「そうと決まれば善は急げだよ！」

と、愛子は俺の手を引っ張ってくる。

優「じゃあ行きましょ」
焔「そうだな」

第拾七話　待ちわびた？男達の初デート？（前書き）

作「更新するのに時間が掛かってしまいました申し訳有りません！！」

焔「大丈夫かよ」

リリ「とにかく俺の出番を増やせ」

焔「久し振りだな」

作「それでは第拾七話、どうぞっ！！」

リリ「俺を呼んどいてすぐそれか！！」

焔「出番少ないんだからもう少し出させてやれよ」

第拾七話　待ちわびた？男達の初デート？

ーーーー映画館

焔「へぇ～、これが映画館って所なのか」
優「あれ？、今まで知らなかったの？」
焔「映画館って単語だけは知ってたんだがな」
愛「そう言えば焔王君って予算の方は大丈夫なの？」
焔「任せろ、１００万ある」
愛「ふ～ん・・・って１００万も持ってるの！？」
焔「フフッ、ちょっと奮発したからな」
優「どう奮発したら百万も手に入るのよ？」
メ「嘘つけ。本当は予め家に有った金を持ってきただけだろ」
焔「チッ、バレたか」
愛「それもそれで凄いよね」
愛「ところで何でキミがココに居るの？」
メ「暇だから彷徨いてたんだが、その時偶々お前等を見つけたんだ」
優「遭遇率高いのね」メ「じゃあ失礼する」
焔「何だ？もう帰るのか」
メ「空気を読んで帰る」

そう言ってメガギアは床の中に消えていった。

明「あれ？焔王達も映画を観に来たの？」
焔「それ以外くる理由は無いと思うんだが」
奇遇にも明久達と遭遇した。
明「まあそうだね」
美「へぇ、工藤さんと木下さんも観に来てたんだ」
愛「って事は他にも誰か来てたりして」
優「流石にそれはーーーーあれ？代表」

翔「・・・雄二、何観たい？」
雄「早く自由になりたい」

・・・・・居た。

雄二の手に手錠がはめられているがーーーー翔子の出過ぎた恋心と

見ておこう。

翔「・・・じゃあ、地獄の黙示録完全版」
雄「おい待て！！それ３時間２３分もあるだろ！！」
翔「・・・２回観る」
雄「１日の授業よりも長いじゃねぇか！！」
翔「・・・授業の間、雄二に会えない分の埋・め・合・わ・せ」

ガチャガチャッ

雄「やっぱ帰る！！」

あ、雄二が帰ろうとしてる。

翔「・・・今日は帰さない」

バチバチッ

雄「翔子、待て、お前それぎゃあああ！！」

逃げようとした雄二は翔子のスタンガンで虚しく地に伏した。

いやその前に何で翔子はスタンガンなんて物騒な物を持ってるんだ？

翔「・・・学生2枚、2回分」
店「はい学生1枚気を失った学生1枚無駄に2回分ですね！」

スゲェ！！あれだけのスピードで1回も噛まずに台詞を言い切り、しかもスタンガンで焦げて気絶してる雄二を気にも止めないなんて何もかも凄すぎるだろ！！

瑞「素直に気持ちを打ち明けられるって素敵です」
美「憧れるよね～」

先ほどのやり取りを見て、美波と瑞希は目を輝かせていた。

・・・アレに憧れているアイツ等もどうかと思うが。

愛「代表は先に行っちゃったし、折角だからここに居る皆で一緒に映画を観ない？」
焔「俺は別にいいが・・・明久達はいいのか？」
明「いいね、そうしよう」
美「ウチもいいわよ」
焔「よし、じゃあ今日は俺の奢りだ」
明「え、いいの！？」

美「そんな、悪いわよ」
焔「いいからいいから」
優「吉井君に島田さん。今日は御言葉に甘えさせて貰ったら？」
明「じゃあ頼むよ」
美「そうね。有難う」
瑞「有難う御座います」
焔「じゃあト？・スト？リーでも観ようぜ」

「「「「「賛成！！」」」」」

その後、皆で楽しくト？・スト？リーを観てその日は解散した。

オリキャラ設定・参（前書き）

再びオリキャラです。最初の人間出しちゃいました。

オリキャラ設定・参

新井不火譜（にいしらふ）

焔王をサイボーグにした張本人
多分ちゃんとした人間
右腕を自ら強化改造した
髪はロン毛
言うまでもなく男
世界征服を目論んでいる
焔王達とは前から知り合いになっている

ジン

不火譜に作られたサイボーグ
不火譜とはワケ有りで知り合う
焔王と違って機械の体が剥き出しになっている
顔は黒点の目のみ
背中を開け、中から無数の手を出せる

カゲロウ

別名、殺戮魔神
堕天使の時の焔王
性格はサイボーグの焔王と違い残酷
顔は焔王と瓜二つ
人間が大嫌い
焔王の性格や思考によって誕生した

ハバーティ

別名、恐殺惨魔
顔は目が四つ付いているが視力は弱く、その分聴覚が発達している
口には鋭い牙が生えている手も四本生えていて、全てが巨大な鎌になっている
跳躍力が凄く、最大１００ｍまで跳べる

ゼロ

別名、震謎項
巨大な一つ目の悪魔
会話する際にはテレパシーを使う
見る者に目眩を起こさせる事が出来る
目から強烈なビーム、総激波（ガルム・バースト）を出す

オリキャラ設定・参（後書き）

皆もこれからドンドン出していくつもりです。

第拾八話　現実と非現実（前書き）

作「第拾八話、更新完了！！フッフッフ」

焔「病院行くか」

第拾八話　現実と非現実

ーーーーFクラス

焔「よう雄二。昨日のデートはどうだった？」
雄「お前にはアレがデートに見えるのか？」
焔「人間ってのは物事に集中し過ぎるとついつい過剰行動を取っちまうモンなんだぞ？」
雄「いや、人を無理矢理拘束してスタンガンで気絶させる事を俺は断固デートとなど認めん！！」
焔「翔子が可哀想だな」
雄「俺が可哀想だとは思わないのか！？」
焔「ああ」
雄「お前最低だな・・・」
焔「何勘違いをしてる？俺は雄二の為を思って言ってやってるんだぞ」

リリ「なあ焔王」
明「ん？君誰？」
リリ「・・・お前が焔王の知り合いじゃなけりゃ即座に首を切って

る所だが」
焔「ようリリアスク。俺に何か用か？」
リリ「重要な知らせがある・・・」

ん？重要な知らせ？

美「重要な知らせって何なのよ？」
リリ「恐らくお前に言っても意味無いな」
焔「じゃあ言ってみろ」
リリ「分かった。言うぞ」焔「おう」

リリ「・・・暇だ」
焔「帰れ」
リリ「だろうな」

明「えぇっ！！今の間って何だったの！？」
雄「まあ大体予想はついてたんだがな」
リリ「だろ？悪魔ってやる事無いからな」
焔「なら校内でも彷徨いてたらどうだ」
リリ「そうさせて貰うか」
焔「あまり他の奴等に見つかるなよ」
リリ「分かってる」

リリアスク退室。

ガラッ

キーンコーンカーン
鉄「キーンコーンカーン！よーし、席に着け！！ＨＲを始めるぞ～、っと皆もう着いてるな」

何か来た。しかもチャイムと自分の声をハモらせやがった。いや別に駄目って訳じゃないけど・・・

美「あれ？何で西村先生がココに居るんですか？」
鉄「お前等があまりにもバカなんで少しでも成績向上の為にと、今日から福原先生に代わって補習担当のこの俺がFクラスの担当を務める事になった！！」

「「「「「なぁーにぃーーーー！？」」」」」

明「鉄人がFクラス担当！？」

鉄「それと崇眞が真の学年主席どころか全校の主席になったぞ」

明「へぇ～、やっぱり焔王って凄いんだね」
焔「全校って事はこの学校で一番点が高いのか？」
雄「そういう事だ」
F「俺は前から知ってたんだがな」
F「そりゃ試召戦争してる所を見てりゃ誰でも分かるだろ」
F「ならアイツは鞭で打たれる側だな」
F「崇眞結婚してくれ」
焔「・・・・・・」
秀「・・・ワシの気持ちが分かるじゃろ？って焔王！？しっかりするのじゃ！！」
鉄「これからビシバシやっていくつもりだから覚悟しておけ！！」
焔「キャーーーー！！鞭はイヤーーーー！！」
鉄「・・・お前は何を言ってるんだ？」

ーーーー放課後

普段の日常を終えて、いつものFクラスメンバーに翔子、愛子、優子の3人が加わって帰る事になった。

愛「やっぱり焔王君が主席になったんだね」
翔「・・・頭がいい」
優「全校で一番なんでしょ？凄いじゃない」
焔「まあ絶対暗記装置（パーフェクトメモリーシステム）が有ったらの話だからな～・・・」

愛「気になったんだけど他にも仲間が居るの？」
焔「まあな」
雄「一体どれだけ居るんだよ？」
焔「まあ相当な数だ」
明「じゃあ一気に全員の名前教えてよ」
焔「ダ～メ！」
明「え、どうして？」
焔「出てきてからのお楽しみって言うのと、後は俺の好奇心だ」

明「本音は？」
焔「明久の頭じゃ一度に教えた所で全部覚えきれないと思ってな」
明「それは僕に対する宣戦布告とみていいんだね？」
焔「悪い悪い。本音だ」
明「本音なの！？そこは普通冗談だじゃないの！？」
雄「ん？」
瑞「どうしたんですか？坂本君」
雄「なあ焔王。アレってお前の知り合いか？」

雄二と同じ方を見ると、電柱の上に1体のロボットが屈んでいるのが見えた。

全身フルメタルで体型は人型、何故か顔には「47」と書かれていた。

愛「覚え無いの？」
焔「ーーーーっ！？」

愛子の質問に答えようとした瞬間、ソレはいきなり襲い掛かって来た。

焔「よく分からねぇが殺るっきゃなさそうだな」

相手が繰り出してきた拳を紙一重で交わし、大剣になった腕を顔に叩きつける。

それを食らったロボットは車を巻き込んで壁に激突した。

焔「もう1発！」

次に左腕をロケットランチャーに変えてロボットの額に打ち込む。

焔「何かBクラス戦みたいに呆気なかったな」
雄「お前が強すぎるだけだと思うが」
優「大丈夫だった？」
焔「ああ、問題ない」

皆が駆け寄って来て、安堵の声が上がる。

その時、俺の視界に1人の人物が映った。

焔「・・・・・・？」

髪は肩位まで伸びていて、黒い服とズボンを身に着けーーー帽子を被っていた。

焔「・・・！！」
美「どうしたのよ？」
明「誰か居るの？」

その時、男が此方を振り向き・・・目が合った。

間違いない。アイツだ。

愛「焔王君？」
焔「愛子。どいてくれ」
愛「え・・・？」

男がビルの影に入りかけていた。

焔「・・・っ！！」

ダッ

秀「どうしたんじゃ！？」

雄「おい焔王！！」

ビルの角を曲がったが、そこに男の姿は無かった。

焔「そんな・・・」

目の前にある長い道が、本当に何処までも続いている様に見えた。

第拾九話　心理への道と大事な学園祭（前書き）

感想の受付がユーザーからのみだという事につい最近気付きました！遅れてすみません！なので制限を無しにしておきました！！

第拾九話　心理への道と大事な学園祭

ーーーー屋上

焔「・・・分からん」

清涼祭の季節が近い中、俺は昨日の出来事について考え事をしていた。

急に襲い来たロボット。
見覚えのある男。

焔「俺の見間違いだったかな・・・」
ガ「1人で考え事とは珍しいですね」

何時の間にかガンダズクが隣に居た。

焔「（コイツに聞いてみれば何か分かるかも知れないな・・・）」
ガ「どうしました？」
焔「いや実はだな、昨日何者かに襲われかけてな」
ガ「はい」
焔「ソイツと接点が有ったかどうか思い出そうとしていたんだ」
ガ「成る程。怪我は有りませんでしたか？」
焔「まあな」
ガ「しかし私の知る限り、その様な知り合いは居ませんね」
焔「（とすると、何でアイツは襲い掛かったりしてきたんだ？）」

正直言って、本当に全然覚えが無い。何か危険な組織に関わった覚えも。

ガ「悩み事と言うのはそれだけですか？」
焔「あと1つだけ。俺の知人で帽子をよく被る奴は居たか？」
ガ「ええ。居ましたよ」
焔「やっぱりな、で、ソイツの名前は？」
ガ「確か名前は・・・」

バンッ！！

鉄「見つけたぞ崇眞！！」
焔「これはこれは」
鉄「これはこれはじゃないだろう！ここで何をしてる！？清涼祭の出し物が決まってないのはＦクラスだけだぞ！！」
焔「清涼祭？そうか、そうだったな！！」
ガ「こんにちは。ヒガシローランドゴリラさん」
鉄「・・・初対面でそんな名前を呼ばれたのは初めてだが、悪気が無い様だから今回は見逃してやる。いいか、俺は人間だ」
ガ「嘘はいけませんよ。私は動物か人かを見分ける能力に関しては凄くいいと思ってますから」
鉄「崇眞。こういう時俺は何て言えばいいんだ？」
焔「ガンダズク。この人はゴリラじゃないぞ」
鉄「うむ。よく言った」
焔「残念ながら人間だ」
鉄「残念ながらというのが少々引っ掛かるんだがまあいい。早く教室に戻るぞ」ガ「ところで例の帽子を被った人ですが・・・」
焔「ああ」
ガ「羅津義隼（らつぎはやぶさ）です。それではまたの機会に」
焔「おう。またな」

羅津義・・・？

鉄「なあ崇眞。さっきの人は誰なんだ？」
焔「まあ正確には人じゃないんだがな」
鉄「どういう事だ？」
焔「まあ平たく言えば人間が言う神みたいな存在だ」
鉄「よく分からんな」
焔「別に知ってなくてもいい事だろ」
鉄「まあ確かに」

隼・・・？

そうこうしている内に、Ｆクラスに着いた。

焔「さて、アイツ等、何を出すか決めたかな？」

鉄「分からん」

ガラッ

焔「ちーっす」
明「遅いよ焔王！何をやってたのさ？」
焔「はは野暮用で」
鉄「さてお前等、清涼祭の出し物は決まったか？」
美「一応、候補はこの３つです」

そう言われて俺と鉄人はほぼ同時に黒板を見た。

候補１・写真館【秘密の除き部屋】
候補２・ウェディング喫茶【人生の墓場】
候補３・中華喫茶【ヨーロピアン】

焔「・・・・・・」
鉄「・・・補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな」
F「せ、先生！！それは違うんです！！」
F「そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！！」
F「僕らがバカな訳じゃありません！！」

焔「よく分からんが、これは皆で決めた事じゃないのか？」
鉄「馬鹿者！みっともない言い訳をするな！！」

お？何か鉄人がマトモな事を言ってるぞ？

鉄「先生はバカな吉井を選んだ事自体が頭の悪い行動だと言ってるんだ！！」
焔「そっちかい！！」

気のせいか明久が鉄人をジト目で見ていた。

・・・しょうがないな。

焔「なあ皆、普通に稼ぎを出してクラスの設備を良くしようとか、そういった気すらないのか？」

俺がそう言うと、クラスの皆の目が輝きだした。

F「そうか！その手が有ったか！」
F「流石は崇眞だ！！」
F「いい加減この設備にも我慢の限界だ！！」
F「俺の嫁！！」
F「結婚してくれ！！」
焔「・・・・・・」
F「お化け屋敷とかの方が受けると思う」
F「簡単なカジノを作ろう」
F「焼きとうもろこしを売ろう」

・・・変な事言ってる奴はほっといてどんどん意見がバラバラになってる。

美「はあ・・・まったくもう・・・ねぇ、アキ。坂本を引っ張り出せない？これじゃ、あまりにまとまりが悪すぎるわ」

明「う～ん・・・無理だと思うよ。雄二は興味の無い事には驚く程冷たいから」
美「そっか・・・もうっ。とにかく静かにして！決まりそうにないから、店はさっき挙がった候補の中から選ぶからね！」

確かに今の状況じゃ少々強引でも話を進めてしまうのが懸命かもな。

美「ほらっ！ブーブー言わないの！この3つの中から1つだけ選んで手を挙げること！良いわね！」

美波は結構こういうのに慣れてるんだな。

美「それじゃ、写真館に賛成の人！ーーーーはい、次はウェディング喫茶！ーーーー最後、中華喫茶！」

流石に今の俺でもここまではしない。昔の俺は分からないけど。

美「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

多少無理矢理の様な気がするが、これで取り合えず出し物が決まった訳だ。

須「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」
ム「・・・（スクッ）」

あの二人、料理が得意なのか？

明「ムッツリーニ、料理なんて出来るの？」
ム「・・・紳士の嗜み」

ぜってぇエロ関連だろ。

美「まずは厨房班とホール班に別れてもらうからね。厨房班は須川と土屋の所、ホール班はアキの所に集まって！」

明久がホール班？まあアイツは女装が似合いそうだから当然か。

瑞「それじゃ、私は厨房班にーーーー」
明「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

焔「ん？何でだ？」
明「っ！？」
秀「御主は分かっておらん様じゃな・・・」
ム「・・・（コクコク）」
焔「・・・何だその『コイツ分かってねぇな』的な目は？」

すると明久は俺にだけ聞こえる様な静かな声でこう言った。

明「姫路さんの料理を食べると死んじゃうかも知れないんだ」
焔「何？」

屋上での惨状はその為だったのか。だとしたら何としてでも止めさせないと！！

瑞「え？吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

しかも自覚無いのか。

焔「ん～・・・アレだ。瑞希は可愛いからホールで客に接した方が店にとっても良いからだ」
明「（焔王ナイス！）」
瑞「じ、じゃあホールでも頑張りますね」

出来ればホールだけにしてほしい。

美「アキ。ウチは厨房にしようかな～？」
明「うん。適任だと思う」
美「・・・・・・」
秀「それなら、ワシも厨房にしようかの」
明「秀吉、何をバカな事を言ってるのさ！そんなに可愛いんだから勿論ホールに決まってみぎゃあぁっ！！み、美波様！！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」
美「・・・ウチもホールにするわ」
明「そ、そうですね・・・それが良いと、思います・・・」

そんな感じで、俺達Fクラスの生活が懸かった学園祭が幕を開けた。

第弐拾話　野暮用中と知らない間に交渉成立？（前書き）

え～・・・

遅れた更新です。

すいません・・・

それでは、どうぞ

第弐拾話　野暮用中と知らない間に交渉成立？

ーーーー放課後

ガ「思い出せましたか？」
焔「いや、全くだ」
ガ「まあ、無理に思い出す必要も無いでしょう」
焔「確かにそうっちゃそうなんだが・・・」

それにしてもコイツって人間が好きなのかな？バルログは中々来れないでいるけど。

焔「さて、それじゃあ帰るとするかな」

鞄を持って立ち上がろうとした時、

明「もう僕お婿に行けない！！」

明久の声が聞こえてきた。

焔「ん？明久、どうかしたのか？」
明「助けて！僕がホモ扱いされてるんだ！」
焔「ふ～ん」
明「何その反応！？」
美「それじゃ坂本は動いてくれないって事？」
明「え？あ、うん。そういう事になるかな」
焔「何だ、２人は雄二を呼び戻そうとしてるのか」
美「そうよ」
焔「確かに雄二が居た方が良いだろうな。しかし何でそこまで雄二に拘るんだ？」
美「・・・・・・」

俺が問いただすと、美波は黙りこけてしまった。

焔「さては何かあるな？」
美「何で分かったの！？」
焔「そういう顔してりゃ誰でも分かる。さあ、何があるんだ？」
美「実は瑞希なんだけど・・・」
明「姫路さん？姫路さんがどうかしたの？」
美「あの子、転校するかもしれないの」
明「ほぇ？」
焔「転校？」

成る程。そりゃ友人の為なら誰でもこうなるよなーーーーって、

焔「明久がショートした！！」
秀「電池みたいに言わなくてもいいと思うのじゃが・・・」

いきなり秀吉登場。

焔「まあそうだな」
美「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」
秀「明久、目を覚ますのじゃ！！」
明「秀吉・・・モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい・・・？」

焔「何で瑞希の転校からモヒカンに変わるんだ」
秀「ある意味、稀有な才能かもしれんのう」
明「はっ！！ちょっとトんでた！！」
焔「そりゃまた、どうして急に？」
美「瑞希の転校の理由は『Ｆクラスの環境』らしいのよ」
焔「つまり単に設備の問題って事か」
美「それに瑞希は、身体も弱いから・・・」
明「そうだよね。それが一番マズいよね・・・」

瑞希の転校か・・・。黙ってる訳にはいかねぇな。

美「・・・アキはその・・・・・・瑞希が転校したりとか、嫌だよね・・・・・？」

美波が探る様な目で明久を見ている。

安心しろよ。アイツはそんな冷たい人間じゃないからな。

明「勿論嫌に決まってる！姫路さんに限らず、美波や秀吉や焔王であっても！」

焔「・・・そうか」
美「そっか・・・うん、アンタはそうだよね！」

やけに嬉しそうだな。そりゃそうか。

焔「美波は明久の事がーーーー」
美「ち、ちょっと！？」
焔「おっと失礼、うっかり声に出ちまった」
明「ねぇ、今の続きって何なの？」
焔「明久。雄二に連絡してみてくれ」
美「そ、そうよね。アキ、早く電話してよ」
明「え、無視？・・・分かったよ、電話するよ」

明久が携帯電話を取りだし、雄二の電話番号を押している。

雄『ーーーーもしもし』
明「あ、雄二。ちょっと話がーーーー」
雄『明久か。丁度良かった。悪いが俺の鞄を後で届けにーーーーげっ！翔子！」
明「え？雄二。今何をしてるの？」
雄『くそっ！見つかっちまった！とにかく、鞄を頼んだぞ！！」
明「雄二！？もしもし！もしもーし！」

・・・？

美「坂本はなんて言ってた？」
明「えっと、『見つかっちまった』とか『鞄を頼む』とか言ってた」
美「・・・何それ？」

美波が『使えないわね』といった目で明久を睨む。

流石に酷くないか？

秀「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

前から思ってたんだが、何で翔子は雄二の事が好きになっちまったんだ？

美「そうすると、坂本と連絡を取るのは難しいわね」
明「いや、これはチャンスだ」
焔「ん？どういう事だ？」

明「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちょっと2人共協力してくれるかな？」
美「それはいいけど・・・坂本の居場所は分かっているの？」
明「大丈夫。相手の考えが読めるのは、何も雄二だけじゃない」
焔「何か考えがある様だな。俺も御一緒するぞ」
明「よし。じゃあ行こう」

ーーーー？？？

明「やぁ雄二。奇遇だね」
焔「お、雄二じゃないか」
雄「・・・どういう偶然が有れば女子更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ」

雄二の言う通り、ここは女子更衣室だ。俺達の予想がこうも簡単に当たるとは。

焔「しかし女子更衣室の中ってこんな風になってたんだな」

雄「無視するな」
焔「・・・ん？」

そこで、あるロッカーのドアに挟まってる物が目に入った。

焔「何だコレ？」
明・雄「・・・あ」

焔「分からん。一体何に使うんだ？」
愛「ひょっとして見るの初めてなの？」
焔「だな。今までこういう物には無縁だったからな」
優「・・・何してんの？」
焔「何って、初めて見る物に興味を抱いてるんだが・・・まさかこうやって使うのか？」

そう言って、ソレを頭の上に被せる。

焔「結構いいフィット感だ。間違いないな」
愛「残念ながらハズレ。ソレはブラジャーって言ってね」
優「女子の胸につける物なのよ」

焔「え？そうなのか。違ったな・・・って」

待てよ・・・？ブラジャーを見ながら話してたが、この声は・・・

・・・優子と愛子？

俺は後ろを振り替える。

焔「・・・・・・」
愛「・・・・・・」
優「・・・・・・」

予想通りだ。

そして、自分の前にあるロッカーに名前が書いてあるのに気付いた。

『木下優子』

焔「コレ御返しするよ」
優「あら、そう？」
焔「愛子。勘違いするなよ？俺はアレがブラジャーだって事を知らなかったんだ」
愛「うん、そうだね」
焔「さてと・・・」

雄二達が逃げた跡なのか、窓が開いていた。

焔「じゃ」
ガッ
優「待ちなさい」

焔「ハハッ、なあ優子。落ち着けよ」
優「アタシは落ち着いてるわよ。別に怒ってもいないし」
焔「そうかそうか。じゃあこの手をーーーー」
優「ブラジャーに興味を示すって事は女装したいって事よね？」
焔「・・・ハイ？」
優「丁度ここに使われてない制服が」
焔「さらばだ！！」
優「あぁっ！！ちょっと、焔王！待ちなさい！！」
愛「ボクも焔王君の女装姿見たいのに！」
焔「悪いが俺は御免だ！！」

空いている窓を一気に飛び出し、雄二達の元へ向かう！！

ーーーーFクラス

焔「オラァッ！！」

バコン！！

メ「バコンってのはドアを開ける時の効果音じゃないと思うぞ」
焔「何だお前か。雄二達を見なかったか？」
メ「アイツ等なら学園長室に行くって言ってたぞ」
焔「オーケー、分かった」

さては設備の問題で学園長に相談でもしてるのか？

学園長室が見えてきた時、雄二と明久が出てきた。

焔「よう・・・」
雄「何だ、焔王か。遅かったじゃないか」
焔「じゃあ何で置いてったりしたのかなぁ？」
明「だって早く設備の交渉をしなくちゃいけなかったからさ」
焔「まあ今回は見逃してやる」

勿論タダでは済まさないが。

焔「じゃあ取り合えずその交渉とやらを済ませようか。」

雄「今終わった所なんだが・・・」

焔「え、何？俺の出番もう終わり？」

・・・こんな終わり方も有るもんなんだな。

正直、ガッカリ。

第弐拾壱話　食物兵器と嘆きの連鎖（前書き）

？「アイツは何処だ・・・？」

？「この辺だって事は分かってるんだが・・・」

？「まあＲＰＧの宝探しみたいなモンか」

？「待ってろよ、焔王」

第弐拾壱話　食物兵器と嘆きの連鎖

美「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」
明「ホント、いつもはただのバカなのにね」
焔「お前らが言える立場なのか？」

ついに訪れた清涼祭。

Fクラスはいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

明「このテーブルなんて、パッと見は本物と区別がつかないよ」

教室内の至るところに設置されているテーブルを見ながら明久が言う。

瑞「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」
焔「成る程。これは演劇部の小道具か。道理で良い生地だと思ったぜ」
秀「ま、見かけはそれなりのモノになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲る。すると、その下には見慣れた汚い箱が。

美「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」
明「きっと大丈夫だよ。こんな所まで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」
瑞「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールする様な人は来ませんよ、きっと」
明「よし、じゃあこれで喫茶店は完璧だね」
ム「・・・飲茶も完璧」
明「おわっ！」

いきなりムッツリーニの登場。
・・・相変わらず気配を消すのが得意なんだな。

焔「ムッツリーニ、厨房の方は大丈夫か？」
ム「・・・味見用」

そう言ってムッツリーニが差し出したのは、木のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

瑞「わぁ・・・美味しそう・・・・・・」
美「土屋。これウチ等が食べちゃっていいの？」
ム「・・・・（コクリ）」
秀「では、遠慮なく頂こうかの」

瑞希、美波、秀吉の３人が胡麻団子を頬張る。

瑞「お、美味しいです！」
美「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」
秀「甘過ぎない所も良いのう」

と、大絶賛。そんなにも美味いのだろうか？

明「それじゃ、僕も貰おうかな」
ム「・・・（コクコク）」

ムッツリーニが残った1つを明久に差し出す。

そして、それを一口頬張る。

明「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ」

ん？何かソイツだけ違うんじゃないか？

明「甘過ぎず、辛すぎず味わいがとってもーーーーンゴパッ」

終いには有り得ない音が出ちまってる！！

さては瑞希の手料理なのか！？

秀「あ、それはさっき姫路が作ったものじゃな」
ム「・・・・・・！！（グイグイ！）」
明「む、ムッツリーニ！？どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？」

そんなにヤバイのか。ちょっと試食してみるか。

雄「うーっす。戻ってきたぞー」

そんなところにナイス（？）なタイミングで雄二が戻ってきた。

焔「おう、おかえり」
雄「ん？何だ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

あ、何の躊躇いもなくバイオ兵器を食った。

秀「・・・大した男じゃ」
明「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」
雄「？お前等が何を言ってるのか分からんが・・・ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘過ぎず、辛すぎず味わいがとってもーーーーンゴパッ」

すげぇ既視感。

試食する気失せちまった。

でも全部食った訳じゃないし、一体どうすれば・・・

リ「よう焔王。喫茶店とやらは上手くいってるのか？」
焔「ああ、まだ始まってすらいないがな。これなら大丈夫だろ」
リ「お、これはいわゆる胡麻団子じゃないか？」
焔「・・・あ」

俺が止める間もなく、リギンスは胡麻団子を口にしてーーーー

ドシャッ

顔面から豪快に崩れ落ちた。

今まで誰にも負けた事が無かった光の堕天使リギンスが、たった一

口で気を失うとは・・・恐るべし！！

バ「ヨウカゲロウ。キテヤッタゾ」
焔「よく来たな、バルログ」
バ「・・・ン？ナンデコイツハタオレテル？」
焔「知りたいならコイツを食うがいい」
バ「？ヨクワカランガ・・・ドレドレ？」

そして、最後の一欠片を食しーーーー

ガシャッ

バルログまでもが、瑞希の胡麻団子の餌食になった。

しかし何はともあれ、多少のリスクを負ったが、これで何とかバイオ兵器の処理を成功させる事が出来た訳だ。

めでたしめでた・・・し・・・？

第弐拾弐話　駄弁る神と回りからの目（前書き）

・・・こんなにも更新が遅い作者ですが、何卒温かい目で御願いします。

それでは、どうぞ。

第弐拾弐話　駄弁る神と回りからの目

瑞「あれ？この2人はどうしたんですか？」

張本人が一番分かっていない様だ。

天然なのか？

焔「ああ、ちょっと転んだらしくてな」

気楽に言っていると見せかけ、必死に2人の顔をひっぱたく。

雄「おい焔王。人口呼吸をしなくていいのか？」

瑞希に聞こえない声の大きさで雄二がそう言ってきた。・・・て言うかよくあの状態で生き返れたな。

焔「人口呼吸じゃ意味が無い。コイツ等の体内はスッカラカンだからな」

雄「そうなのか？・・・まあよく考えれば堕天使だからな」

明「ねぇ雄二。そろそろ行った方が良いんじゃない？」

雄「そうだな。よし。少しの間喫茶店は秀吉とムッツリーニに任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

美「あれ？アンタ達も召喚大会に出るの？」

確認する様に明久を見る美波。

明「え？あ、うん、色々あってね」

適当に言葉を濁すって事は・・・やはり何か有るな？

美「もしかして商品が目的とか・・・？」

明「う～ん。一応そういう事になるかな」
美「・・・誰と行くつもり？」
明「ほぇ？」

美波の目がスッと細くなる。間違いない、奴は仕掛けようとしている。

瑞「吉井君。私も知りたいです。誰と行くつもりなんですか？」
明「だ、誰と行くって言われても・・・」

気付けば瑞希も戦闘モード。しかし明久は何で答えを言うのを拒んでるんだ？

雄「明久は俺と行くつもりなんだ」

・・・そんな事言って大丈夫かよ。

美「え？坂本とペアチケットで『幸せになりに』行くの・・・？」
雄「俺は何度も断っているんだがな」

あーっと明久裏切られた時みたいな顔になってる！！

美「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が・・・」
明「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉は凄く引っ掛かる！それと秀吉！少しでも寂しそうな表情をしないでよ！！」
瑞「吉井君。男の子なんですから、出来れば女の子に興味を持った方が・・・」
雄「それが出来れば明久だって苦労はしてないさ」
明「雄二、最もらしくそんな事を言わないで！全然フォローになってないから！？」

焔「おい2人共、召喚大会は良いのか？」
雄「おっと、確かにそうだな。行くぞ明久」
明「・・・くっ！とにかく、誤解だからね！！」

まるで子悪党の様に捨て台詞を言い残し、明久と雄二が教室を後にした。

リ「・・・アイツ等は何か企んでるみたいだな」
バ「カオニデスギダ」

いつの間にか息を吹き返したリギンスとバルログが俺に言ってきた。

焔「お前等なら必ず生きて帰ってくると思ってたぞ」
リ「フン、そう簡単にはくたばらねぇよ」
バ「・・・ヨクモオレニヘンナモノヲクワセテクレタナ。アア？」
焔「しょうがないだろ。あの時はああするしか無かったんだからよ」
バ「ジャアクチデイエ」
焔「・・・せめて3分前の俺に言ってくれ」

リ「その案が思い浮かばなかったのか？つくづく、お前は変わったな」

焔「・・・うっせ」

ガラッ

リリ「・・・・・・」

俺達が何気無い会話をしていると、急にFクラスの扉が開き、リリアスクが現れた。

バ「フツウニどあヲアケテハイッテクルトハオマエラシクナイナ」
リリ「・・・疲れた」

見ると、確かにいつもの笑顔が困った様な表情になっている。

バ「イッタイナニガツカレタッテイウンーーー」

愛「やっほー、焔王君♪」
優「Fクラスの調子はどう？順調？」
バ「ーーーナルホド、ソウイウコトカ」

リリアスクに続く様に、愛子と優子が入ってきた。

愛「あ、キミはいつかの悪魔君」
優「何て言うか久し振りね」
リ「まあそうだな」
焔「リリアスクは何で疲れてるんだ？」
リリ「ここに来る途中で車に引かれて猫に蹴られてＵＦＯが現れやがった」
焔「そうか・・・ん？１つ変な事が・・・」
リリ「ムカついたから事ある度に始末した」
焔「ＵＦＯは許してやれよ！！１００％無罪だろ！？」

理不尽な怒りで始末されたＵＦＯはさぞ可哀想だろうな。うん。

秀「む？姉上、また焔王に会いにーーーち、ちがっ！姉上！その関節はそっちには曲がらな・・・っ！！」
優「アンタは黙ってなさい！！」

何か優子が秀吉に間接技を決めていた。

焔「おっと、俺も早く喫茶店を手伝わないとな」

優「じゃあ焔王」
焔「ん？何だ？」
優「コレを着なさい」

そう言って優子が俺に差し出してきたのは・・・

・・・チャイナ服。

焔「お前等・・・まさかソレを着させる為だけにここへ・・・？」

愛「本当はいつまでもここに居たいんだけどね。生憎、Ａクラスの出し物があるからさ」
焔「・・・さいですか」
優「今日が終わるまで、ずっと着てなさいよ」

そして、２人は急ぐ様にＦクラスを立ち去った。

・・・着ないといけないのか？

リリ「お前、結構似合うかもしれないな」
バ「俺への謝罪として着ろ」

駄目だ。ここには俺の味方が居ない。
万事休す、か・・・

ガ「こらこら。いけませんよ２人共」

焔「おお！！ガンダズク！！」

何処からともなく、ガンダズクが現れ、悪人を注意してくれた。

何てイイ奴なんだ！！

凄いよ！！アンタ勇者だよ！！

ガ「こういう時は力ずくでもチャイナ服を着させないと・・・」

焔「うわあああああああああああ！！」

気付くと、俺は廊下を全力疾走していた。

第弐拾参話　見せ物？黒幕の陰謀？（前書き）

あまり進展無くてすいません・・・。

温かい目でお願い致します。

第弐拾参話　見せ物？黒幕の陰謀？

ガ「待ちなさい、焔王」
焔「やなこった！！」
ガ「今のは私の冗談です」

ズザーーーーッ

俺は凄まじい効果音と共にズッ転けた。

焔「冗談かよっ！？」
ガ「そうです。しかも今凄い勢いで滑ってましたね」
焔「そりゃいきなりあんな事言われたら誰でもああなるだろ！」

でも正直、冗談で良かったと思う。コイツまで俺の女装を望んでた

ら困るから。

ガ「しかし彼処まで取り乱す必要も無かったでしょうに」
焔「お前が急にあんな事言うからだ！！」
ガ「はいはい。取り合えず一旦教室に戻りましょう」
焔「適当に流された気がするが・・・まあいい」

中に入ると、美波が話し掛けてきた。

美「あれ？焔王、何処に行ってたの？」
焔「ああ、ちょっと色々あってな・・・今から召喚大会だろ？」
美「ええそうよ」
ガ「大会ですか。頑張って下さいね」
瑞「有難うございます」
焔「簡単に負けるなよ」
美「任せなさい！」

そして、美波と瑞希は去っていった。

ガ「安心して下さい」
焔「ん？何を？」
ガ「あの２人も本気で女装を望んでたわけじゃありませんから」
焔「・・・分かってる」

良かったー！！↑（本音）

F「いらっしゃいませ」
F「中華喫茶ヨーロピアンにようこそ」

心の底から安心していると、開店最初の客が来た。

リリ「じゃ、そういう事で」
バ「セイゼイガンバッテクレヨナ」
焔「帰るのか？もう少しゆっくりしていけば良いのに・・・」
リリ「あのなぁ、考えても見ろ。何も知らない人間が俺達を見た時の反応を」
焔「写メを撮る」
リリ「違うだろ」
バ「ソウジャナクテダナ、フツウニカンガエレバワカルダロ」
リリ「要は俺達にビビって客が来なくなる危険性が有るって事だ」
焔「そりゃ無いだろ。現に客ビビってないし」

ガラッ、

F「いらっしゃいませ」
？「うむ」

ん？アイツは先生か？

焔「なあ秀吉。アレって誰だ？」
秀「教頭の竹原じゃな」

教頭？暇人か？

ガ「いや、暇人ではありませんね」
焔「お前さっきから俺の心読みすぎじゃね？」

あ、そういや他人の心理を読み取るのはコイツの技なんだっけ？

ガ「あの人間、何か良からぬ事を考えてますよ」

焔「・・・何？」

良からぬ事？何をしでかす気だ？

バ「がんだずく。ナニカアッタノカ？」
ガ「・・・ちょっと嫌な予感がします」

アイツは一体何を企んでるんだ？

焔「お前等はここに居てくれ」
バ「アイヨ」
焔「秀吉」
秀「何じゃ？」
焔「雄二達を呼びに行くぞ」
秀「うむ。了解じゃ」

今回は瑞希の存続が掛かってる大事な清涼祭だからな。

召喚大会の会場に来てみると、雄二と明久が殴り合いをしていた。

焔「・・・何やってんだお前等？」

秀「明久に雄二。殴り合いをする位なら早く教室に来てくれんかの？」

明「あれ？秀吉、喫茶店で何かあったの？」

焔「訳は行く途中で話す。だから来てくれ」

雄「・・・分かった」

第弐拾四話　クレーマー未遂・・・そして新たなる企み（前書き）

基本的に焔王が居ない時にナレーションが焔王口調の場合、作者視点となっています。

第弐拾四話　クレーマー未遂・・・そして新たなる企み

ーーーーFクラス

バ「デ、あいつガナニヲスルカワカッテルノカ？」
ガ「分かりません」
リリ「・・・何だソレ」

ガンダズク、リリアスク、バルログの3人は、喫茶店の見張りをしていた。

バ「シッカシヒマダナ」
ガ「ならあの人達の手伝いでもしてたらどうですか？」
バ「ヤナコッタ」
リリ「ん？」

その時リリアスクが見たのは、竹原とアイコンタクトを交わしている2人の男だった。

ガ「どうしました？」
リリ「もしかするとアイツ等かも知れないぞ」
バ「ドレドレ・・・ナルホド、タシカニアクニンノツラヲシテルナ」
ガ「あの人間は、どうやらテーブルの汚さにいちゃもんをつける様ですね」
バ「くろすデゴマカシテタノカ？あれ・・・」
リリ「まあいい。ガンダズク」
ガ「分かってますよ。テーブルを綺麗な物に見せかけさせるつもりだったんでしょう？」
リリ「その通り」

ガ「それじゃ早めに・・・・・・間物変換視（チェンジシーシング）」

ガンダズクがそう言うと、少し空間が揺らめいた。・・・・が、他の客には気付かれてはいない様だ。

バ「・・・ホントウニこれデイイノカ？」
ガ「大丈夫ですよ」

？「よし、準備はいいな？」
？「ああ、行くぞーーーーって・・・ん？」
？「どうした？・・・って何だ！？机が変わってるぞ！？」
？「これじゃ作戦が台無しだぞ・・・」
？「おい、どうする？」
？「どうするも何も・・・これじゃ作戦が台無しだ」

これには竹原も驚いている様子だった。

ガタッと音を立て、２人の男が外へ出ていく。

ガ「ふぅ・・・これで一件落着ですね」
バ「イヤ、マダあいつラヲマルヤキニシテネェ」
ガ「駄目ですって」

焔「よう、待たせたな。何か変わった事はあったか？」
ガ「ちょっとしたクレーマーが来ましたね」
雄「そうか。死体は隠したのか？」
ガ「・・・何で直ぐそっちの話になるんですか？」
雄「おっと、冗談だ」
焔「それよりガンダズク。どうやって撃退した？」
ガ「少しここの人達には幻覚を見てもらいました」
明「幻覚って何？」
焔「ガンダズクは能力の類いとして相手に幻覚を見せる事が出来るんだ」
ガ「なので、この段ボールを綺麗な机に見せました」
明「へぇ～」
瑞「幻覚ですか？」
美「凄いわね」

いつの間にか瑞希と美波が帰ってきていた。

焔「おう、2人共。召喚大会はどうだった？」
瑞「はいっ。何とか勝てました」

瑞希って、こんなに勝ちにこだわるタイプだったか？まあ今回は場合が場合だし、当然か。

焔「ところで雄二」
雄「何だ？」
焔「もうちょっとマシな机を調達出来ないか？」
雄「だな。俺も今考えてる所だ」

しばらくすると、雄二は何かを思い出した様に顔を上げ、

雄「秀吉。ちょっと来てくれ」
秀「何じゃ？」
雄「机を用意できるか？」
秀「一応用意は出来るが・・・あっても2つ程度じゃぞ？」
雄「それで十分だ。その後はまた他から調達してくるさ」
秀「了解じゃ。直ぐに戻る」

そう言い残して、教室内のクラスメイト数名に声をかけて秀吉は足早に去っていった。

雄「おい明久。行くぞ」
明「あ、うん。でも何処に行くのさ？」

明久が呼び止めると、雄二は口の端を吊り上げ、

雄「テーブル調達だ」

悪そうな笑みを浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2878m/

神と人間の交響心環(ハートネイチャーオーケストラ)

2010年10月17日05時34分発行